33

骨 33

目次

消耗　町田トシコ　4
梅雨の記　依田義賢　5
簡易食堂で老人がうたった日録　天野忠　12
落葉　とみおかますごろう　14
北海　井本木綿子　24
かぜのはげしさに　荒木利夫　30
　　山前実治　31
ぼくの劇場遍歴についての自嘲　大鋸時生　8
英詩と女　大浦幸男　18
初心　八尋不二　20
「荒地再訪」再考（続）　安田章一郎　26
作品　西山英雄　16
表紙・カット　佐野猛夫

骨　33号　価　¥200
昭和四十四年八月二十五日発行
編集者　山前実治
発行者　依田義賢
発行所　骨発行所
京都市左京区下鴨泉川町五三
電話七八一―〇七九六　依田方
（骨）への通信及詩集雑誌の御寄贈は左記編集所宛に願います
京都市中京区御幸町御池上ル　双林プリント内　山前実治宛
電話二二一―四三八二

35

同人

荒木利夫　京都市北区小山東元町二六（〇七五）四九一―二四七四
天野忠　京都市左京区下鴨北園町二の九三（〇七五）七〇一―四七八七
井本木綿子　西宮市舞町五ノ四一宝山荘（〇七九八）三三一―五四三六
梅棹忠夫　京都市左京区北白川伊織町六六（〇七五）七八一―六三八四
大浦幸男　京都市左京区下鴨北園町二三（〇七五）七八一―二四七〇
大鋸時生　大阪府八尾市山本町南五の六六（〇七二九）二二一―二八二六
木村三千子　大阪市北区天神橋筋三丁目二三（〇六）三五一―七二四八
佐々木邦彦　京都市東山区山科大塚森町一六の八（〇七五）五八一―六九八三
佐野猛夫　京都市北区紫竹上芝本町三（〇七五）四九二―四二三九
杉本長夫　彦根市丸ノ木町三六（〇七四九二）二―五〇一七
田中克己　東京都杉並区阿佐ケ谷南一ノ四〇ノ八（〇三）三一四―二七八三
冨岡益五郎　京都市左京区修学院石掛町二〇（〇七五）七八一―九五八五
西山英雄　京都市伏見区深草願成町八（〇七五）五六一―三〇四二
町田トシコ　寝屋川市三井百丈山合掌荘（〇七二〇）三一―一二八四
八木一夫　京都市東山区五条坂東大路東入（〇七五）五六一―七三八二
安田章一郎　京都市左京区吉田近衛町府住宅三〇九（〇七五）七七一―四九二三
尋不二　京都市左京区下鴨神殿町（〇七五）七八一―二五〇六
山前実治　京都市東山区南梅屋町（文童社）（〇七五）五六一―一六一七
八前実治　京都市左京区下鴨泉川町五三（〇七五）七八一―〇七九六
依田義賢

骨　35号　価 ¥200

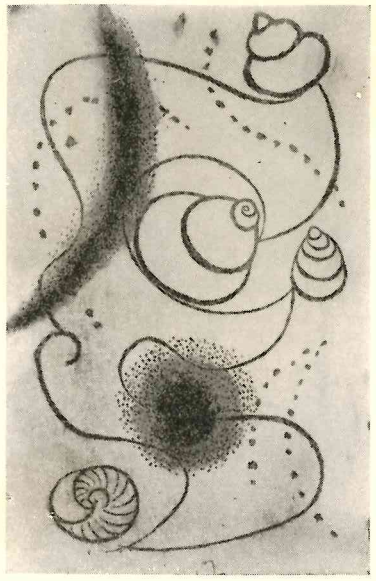
昭和四十五年六月二十日発行

編集者　山前実治
発行者　依田義賢
発行所　骨発行所
京都市左京区下鴨泉川町五三
電話七八一―〇七九六　依田方

〔骨〕への通信及詩集雑誌の御寄贈は左記編集所宛に願います
京都市中京区御幸町御池上ル　双林プリント内　山前実治宛
電話二二一―四三八二

骨

No. 35



1970・6

骨 35 目次

見当山　山前実治　2
きついやつ　荒木利夫　4
春寒二題　依田義賢　6
後生　天野　忠　16
地下鉄　木村三千子　18
日録　とみおかまずごろ　20
眼覚め　井本木綿子　21
忠さんのこと　安田章一郎　8
続・ヨーロッパ再見　八尋不二　14
英詩と女(3)　大浦幸男　22
一日　田中克己　24
編集後記　依田・大鋸　25
表紙・カット　佐野猛夫

一日

田中克己

「荒木利夫さんが編集当番で書かせろといふから」といふ天野忠さんのたよりが届いた。わたしは春さきさまで憂鬱がひどくなるので、このたよりを見て困ったと思った、翌日なんとか憂鬱をとりのぞかうと、先月廿五日に結婚した次女の家へゆくこととした。つれは難産で入院中あづかってゐる長女の坊主、つまりわたしの初孫である。次女の新居は三鷹で、舅姑ともども歓迎されたがなんともゐづらい。離れになってゐる娘たちの住居を一覧したあと、この近くにゐた太宰治の旧居を探そうとも思ったが、これも気乗りせず、孫をつれて義弟のところへゆく。歯科医をしてゐるので孫の歯とわたしの義歯との治療をかねてである。あとは歩いて帰宅すると来客あり、出版社のお使いのお嬢さんで、妻が急いで捺印してゐる。わたしは待って下さるお嬢さんの話相手にまはると、「この間なくなった伊藤整はわたしの義理の叔父」とのお話である。お葬式にも伺はなかったが、わたしは病気になられる前に二回会って、知己であることを知った。中央公論社の「日本の詩歌」にわたしを加へていただいたのは伊藤さんと井上靖さんが推薦されたからで、伊藤さんは他薦自薦の詩人たちを「僕も入ってないんだよ」といって巧みに抑へられた由承った。「瀟洒たる紳士でしたね」というと、姪御さんは「死ぬ時はやつれておもかげはムいませんでした」と仰しやる。大変なてれやだった由、それもわたしと同じである。（忠さんも利夫さんもてれやで、詩人はみなそうなのではないか）。わたしはますますうれしくてお葬式にゆかなかったわけをいひ、讃美歌二八四の最後をちょっと歌って「奥様によろしく」といい、気にしてゐた弔意を表現した。上京後、五十一才で受洗し、仏式神式のお葬式はかなはないのである。この間に妻の仕事が了ったので姪御さんは帰ってゆかれた。

この夜わたしはちょっと寝にくかった。もうちょといい詩を作るなり、いい仕事をしてから昇天したいと思ったからである。（半眠半醒でこれをしるす、二月十九日午前）。

昨年の暮れ、拙詩集『樹木の目』を刊行いたしましたところ、多くの先輩、知友の方々から有益な御感想が寄せられました。そのいずれも、私にとって、まことに有難く、貴重なものと存じますので、そのうちこれをまとめて印刷し、いつまでも保存いたしたく存じます。ここにその御芳名を記し、御礼を申し述べる次第です。（**杉本**）

安藤一郎　田中冬二　大江満雄　福田陸太郎　杉山平一　安部宙之介　宇田良子
天野忠　港野喜代子　八尋不二　佐野猛夫　大野新　天野大虹　井伊文子　中村光行　中川逸司　木下常太郎　西脇順三郎　竹中郁　今岡弘　井手文雄　尾形信太　黒田三郎　杉本春生　大鋸時生　北一平　則武三雄　佐川英三　児玉実用
土橋治重　長島三芳　神保光太郎　前田幸男　村野四郎　小池鉄夫　佐藤寿子
山口長男　井本木綿子　岡崎純　原一郎
館美保子　大浦幸男　中正敏　門田ゆたか　村松正俊　小野文雄　平光善久　依田義賢　安西均　中村漁波林　中川郁雄
荒木文雄　荒木利夫　安部一郎　黒田しのぶ　小出英夫　白井睦子　児玉金吾
祝通子　まど・みちお　谷川文子
（敬称略）

弱り果てての吐露

大鋸時生

ぼくは、かねがね、作家の創作過程を、かい間みたいとの、おうそれた欲望を持っている。テーマが発見され、気負いだって資料収集にあたる段階で、創作意欲が、どんなに、ふくらみ或は、しぼむか。思いもかけぬ彼岸に到着することもあろうし、予定どおりの終点に達して、がっかりすることだってあろう。その他、ぼくの察知し得ぬ、もろもろの事象が発生して勇気づいたり、落胆したりする心情は、きっと興味深いに違いないと考えたからである。もち論、作家の告白めいた作品は数多いが、その主観的叙述は、やはり、その作者の創作のジャンルにあるはず。したがって第三者の観察は大いに異ってくるのが自明だ。そこが、おもしろいと、ぼくは考えた。だが、そんなことは、とても出来ることではないーと、やや、あきらめの心境にいたのだが、思いもかけぬすばらしい条件が、向うから転げこんでいた。同人、依田義賢君の文楽に関する資料メモを、手に入れることが出来たのである。日本の映画作家の第一人者でもある依田君が、戦前の名作「浪花女」のシナリオ化にあたってのち密な資料狩猟活動の記録だった。依田君としては、たまたまぼくが、文楽について多少の知識をもっていることに対し、重大な誤聞がありはしないかと、チェックを希望されたのであるが、ぼくとしては失礼ながら、カモが、わが網にかかった思い。二つ返事でOKして、部厚なメモと取り組んだわけだが、ぼくは、たちまちにして、こうした作業のむつかしさに突き当り、思い上りの恥しさを手痛く、思い知らされた。

メモの内容については、よくもこれだけまで、一つの作品を仕上げるまで、こんなにまで深苦するものか。資料と「浪花女」シナリオ定本とを読みあわせて、よくも、これまでにまとめ上げられたか……など、感心もし、敬畏を感じもしたが、これを通じて作家・依田義賢の創作像を抽出するなどは至難のわざであることとしみじみ痛感したのである。商業映画であるための妥協的心情を、まず消去し、依田義賢の性格からくる資料把握の傾向を、のぞき眼鏡として、このメモの背景にあるものを分析しない限り正鵠は期せられないからだ。ぼくの力量では、それは絶望に近い。

かくて、それを手にしてから五十日以上。ぼくは、手をあぐね、頭を垂れ、ぼくの机の上にのせられた依田メモを眺めつづけ、「こんなことを、やってみたい」と軽はずみに云った〝骨の会〟での発言にホゾを噛んでいる。そして、例えば、ぼくの興味に同調でき、依田君を知悉（その成長、その生活、その思考、その行動 etc）し、しかも文楽を理解している仲間が集って、がやがやと論じ合う手なども、ありそうだなど思ったりもしているが、そんなことは恐らく、不可能だろう。

ただ、骨の関係者で、メモを読んでみたいとの希望者が、かなりの数にのぼるようなら、ぼくなどの、なまじかなコメント抜きで、依田メモを、連載することは、意義があると思う。編集委員の裁定を待ちたい。

にしても、依田さん、ご免下さい。山前君にも連絡が、おくれて申しわけなし。ぼくの心情ご了察のうえ、方々、お許しあれ。お許しあれ。

あとがき

「34号の編集後記。誤字脱字やら大まちがいでえらいことしました。雨にしみ入るが、雪にしみ入るとなり、安保の廃棄はまあよいとし、木村三千子子もゆるしていただく。許されないのは鶴賀加賀太夫、これは江戸の大名人、すみません加賀八太夫さん。もう一つ、骨が追悼号ばっかし出してるとは竹中郁さんの言ならず足立巻一兄であった。やられました。おゆるし下さい。（依田）

いつもの集りに、ひと足早く着いたが因果。〝後書きを三行書けや。早よ。早よ。〟と責めたてられる。なんでも、編集当番――つまり、こっちゃの責任なそうや。

自分で書けばよいのに――仕事を、ひとに押しつけてビールを、あふる荒木の小面憎い顔を見ているうちに、どうやら、三行ぐらいとあいなった。こよいの〝骨の会〟は、又もや荒れそうである。（大の字）

あらたまったきもちで、もしものを書こうとすると、なんといきどおりばかりおおいことであろう。ものをいうのもあほらしく、あまりにもざつばくのみにおっかけられていることよ。じぶんだけはみうしないたくないし、人間ぎらいになりたくないと、はをくいしばる。（Y）

骨

37

骨 37 目次

仏舎利塔にて　町田トシコ　4
雪　依田義賢　5
鳥辺野にて　八木一夫　6
行方他一篇　天野忠　8
朝他一篇　荒木利夫　12
私記録　冨岡益五郎　14
訪問　杉本長夫　18
女　木村三千子　20
冬　山前実治　31
英詩と酒(2)　大浦幸男　10
はんぱな男のはんぱな人生の　八尋不二　22
はんぱな記録(2)
野崎村にはじまるいらだち　大鋸時生　15
残筆記　佐々木那彦　26
ベンハ教会の丘　西山英雄　16
バリ島の目　佐野猛夫　21
表紙　佐野猛夫　扉　佐々木邦彦

骨　37号　価　¥200
昭和四十六年二月二十日発行
編集者　山前実治
発行者　依田義賢
発行所　骨発行所
京都市左京区下鴨泉川町五三
電話七八一―〇七九六　依田方

〔骨〕への通信及詩集雑誌の御寄贈は左記編集所宛に願います
京都市中京区御幸町御池上ル　双林プリント内　山前実治宛
電話二二一―四三八二

同人

荒木利夫　京都市北区小山東元町二六（〇七五）四九一―二四七四
天野忠　京都市左京区下鴨北園町二の九三（〇七五）七〇一―四七八七
井本木綿子　西宮市舟町五ノ四一宝山荘（〇七九八）三三一―五四三六
梅棹忠夫　京都市左京区北白川伊織町六六（〇七五）七八一―六三八四
大浦幸男　京都市左京区下鴨北園町二三（〇七五）七八一―二四七〇
大鋸時生　大阪府八尾市山本町南五の六六（〇七二九）二二一―二八二六
木村三千子　大阪市北区天神橋筋三丁目一五（〇六）三五一―七二四八
佐々木邦彦　京都市東山区山科大塚森町一六の八（〇七五）五八一―六九八三
佐野猛夫　京都市北区紫竹上芝本町三（〇七五）四九二―四二三九
杉本長夫　彦根市城町二丁目五―三八（〇七四九二）二―五〇一七
田中克己　東京都杉並区阿佐ケ谷南一ノ四〇ノ八（〇三）三一四―二七八三
冨岡益五郎　京都市左京区修学院石掛町二〇（〇七五）七八一―九五八五
西山英雄　京都市伏見区深草願成町八（〇七五）五六一―三〇四二
町田トシコ　寝屋川市三井百丈山合掌荘（〇七二〇）三一―二二八四
八木一夫　京都市東山区五条坂東大路東入（〇七五）五六一―七三八二
安田章一郎　京都市左京区吉田近衛町府住宅三〇九（〇七五）七七一―四九二三
八尋不二　京都市左京区下鴨神殿町（〇七五）七八一―二五〇六
山前実治　京都市東山区南禅屋町（文童社）（〇七五）五六一―一六一七
依田義賢　京都市左京区下鴨泉川町五三（〇七五）七八一―〇七九六

38

骨 38 目次

散歩　八木一夫　4
この春　依田義賢　6
ある風景　木村三千子　8
過去帖　とみおかますごろ　22
心中未遂　天野忠　24
どくだみ　山前実治　27
英詩と蟹　大浦幸男　10
はんぱな男のはんぱな人生のはんぱな記録(3)　八尋不二　12
残筆記　佐々木邦彦　16
シィ・ディ・ルーイス『羽毛から鉄へ』抜萃(一)　安田章一郎　20
表紙・カット　佐野猛夫

同人

荒木利夫　京都市北区小山東元町二六（〇七五）四九一―二四七四
天野忠　京都市左京区下鴨北園町二の九三（〇七五）七〇一―四七八七
井本木綿子　西宮市寿町五ノ四一宝山荘（〇七九八）三三一―五四三六
梅棹忠夫　京都市左京区北白川伊織町六六（〇七五）七八一―六三八四
大浦幸男　京都市左京区下鴨北園町二三（〇七五）七八一―二四七〇
大鋸時生　大阪府八尾市山本町南五の六六（〇七二九）二二一―二八二六
木村三千子　大阪市北区天神橋筋三丁目一五（〇六）三五一―七二四八
佐々木邦彦　京都市東山区山科大塚森町一六の八（〇七五）五八一―六九八三
佐野猛夫　京都市北区紫竹上芝本町三（〇七五）四九二―四二三九
杉本長夫　彦根市城町二丁目五―三八（〇七四九二）二―五〇一七
田中克己　東京都杉並区阿佐ケ谷南一ノ四〇ノ八（〇三）三一四―二七八三
冨岡益五郎　京都市左京区修学院石掛町二〇（〇七五）七八一―九五八五
西山英雄　京都市伏見区深草願成町八（〇七五）五六一―三〇四二
町田トシコ　寝屋川市三井百丈山合掌荘（〇七二〇）三一―一二八四
八木一夫　京都市東山区五条坂東大路東入（〇七五）五六一―七三八二
安田章一郎　京都市左京区吉田近衛町府住宅三〇九（〇七五）七七一―四九二三
八尋不二　京都市左京区下鴨神殿町（〇七五）七八一―二五〇六
山前実治　京都市東山区南梅屋町（文童社）（〇七五）五六一―一六一七
依田義賢　京都市左京区下鴨泉川町五三（〇七五）七八一―〇七九六

骨　38号　価 ¥200
昭和四十六年六月二十日発行
編集者　山前実治
発行者　依田義賢
発行所　骨発行所
京都市左京区下鴨泉川町五三
電話七八一―〇七九六　依田方

〔骨〕への通信及詩集雑誌の御寄贈は左記編集所宛に願います
京都市中京区御幸町御池上ル　双林プリント内　山前実治宛
電話二二一―四三八二

残筆記

佐々木邦彦

小雪のちらつく日であった。

毎日新聞大阪本社の人事部長であった、田中三雄氏から、ことしの二月一日付で、西部本社編集局次長兼福岡総局長に、転任して、おおいにはりきっているという、便りをもらった。

「――こちらに来られた折には、ぜひお立寄りください。博多の夜を、いっしょに飲みあるきたいものです――」。

と、むすんであった。

「もう、息子たちも大きくなって、二人の子が、それぞれ個室をほしがるので、家を建てました」。

奈良に、永住するつもりで、家を新築したから、あそびに来てくれ――という、便りをもらったのは、ついさきごろである。そのうち、訪問したいと考えていたのに、福岡へ転任とは、殺生な――。

ずっと以前のことであるが、毎日新聞京都支局長だった、山本礼氏が、西部本社の編集局長として、転任されたとき、当時、美術記者として、京都支局にいた田中氏は、山本氏にひっぱられて、西部本社の学芸部に転勤した。

それからしばらく経って、奈良の支局長となって、奈良に住み、さらに大阪本社の人事部長に昇進した。

大阪の人事部長時代、午前さまになるまで、二人で大阪の夜を飲みあるき、思い出ばなしに、華をさかせたものでるが、こんど、博多の夜を、飲みあるこうと、さそわれるといまでも飛んでいきたい気がする。

もう、二十年来の知遇である。

一九五一年――戦後の関西に進出した、青龍社展が、三年目の秋季展をひらいた、京都大丸の展覧会事務所で、川端龍子先生の、記者会見があった。

京都新聞の山田龍平、朝日新聞の橋本喜三、夕刊京都の原在修氏らとともに、田中氏が同席した。山田、原氏は、顔見知りであったが、橋本、田中氏は、そのときはじめて会ったのである。

みんな若かった。美術記者として、はりきっていた。川端先生が、いつになく、よくしゃべり、絶えずにこにことして、応待されていた印象が、いまでもあざやかによみがえる。めずらしいことであった。

それからしばらくして、田中氏の来訪をうけた。

「毎日新聞京都版で、ユニークな文芸欄をつくることになったので、手つだってほしい。」

と、いうことであった。

「短歌欄は川田順氏、俳句欄は鈴鹿野風呂氏に、選者になっていただくつもりだが、詩の方を、だれかにおねがいしたい。」

とのことで、そのころ、コルボー詩話会に拠っていたわたしは、同人の天野忠氏と依田義賢氏に、交互に選評をしてもらったらということを、すすめた。カットは、わたしが描くこととなった。

投稿詩欄を〈市民の詩〉と呼ぶことにしたのも、田中氏と考えたものである。

いまはないが、毎日新聞京都支局の地下室に「エスクゥイヤ」という、バアともクラブともつかぬ、酒場があった。田中氏は、その地下室を、芸術家のクラブにしたいと、計画を練っている話を、会えば聞かせてくれた。

一九五一年十一月二十日付で、一足さきに

朝日新聞社から、芸術サロンをつくりたいという、招請状がだされた。これを知った田中氏は「やられた」といって、いかにも残念そうであったが、それきり、芸術家クラブの話には、触れなくなった。

朝日新聞社からの招請状には、

「美術、音楽、映画、演劇、文学など、それぞれの芸術の分野で、意慾的な活躍をしておられる、新らしい世代の芸術家と、批評家によって、純粋に、芸術について語りあえる集いを、作りたいと思います。芸術を創るものと、育くむものと、有機的なつながりによって、新らしい芸術創造への可能性を期待するのが、目的です。自己を主張する情熱とともに、他の芸術をも受け入れる謙虚さをもって、あらゆる芸術について話しあう、たのしくまじめなサロンにしたいと思います。

京都の芸術家の第一線をになわれる、左の方々に、朝日新聞から、とりあえず招請状をだしましたが、人選や、今後の運営は、自主的にやっていただきたく、趣旨にご賛同の上、左記にご出席下されば幸甚に存じます」。

という趣意書に、招請状発送者の名がしるされてあった。

麻田鷹司、堂本尚郎、坂東鶴之助、（いまの市村竹之丞）伊藤久三郎、石井春枝、池田総一郎、門明冨志、河井博次、木村斗伎子、桑田道夫、北村英三、中村扇雀、西山英雄、西山綾子、野上素一、大美輝子、佐々木邦彦、桜井武雄、佐野猛夫、管泰男、田中澄江、谷口美子、鶴見俊輔、外村完治、上野照夫、山本格二、八木一夫、山根有三、吉村勲の二十九人が呼びかけられたのである。

十一月二十七日、全員が、朝日会館のアラスカにあつまった。いまは画廊になっているが、アラスカは、この会の会場に、その後たびたびなっている。

第一回の会合で、依田義賢、辻久一、山本知克、斎藤真成、片山九郎右衛門、茂山千之丞、近藤公一、河井玲、J・P・オシュコルヌの各氏を会員として、むかえることとした。

この芸術家クラブを企画したのは、橋本喜三氏であり、またその当時の大島支局長の推進で、実現をみたのであった。会名は〈バクの会〉ときまった。

そのむかし、一九〇九年、木下杢太郎の呼びかけで、吉井勇、谷崎潤一郎、郡虎彦、北原白秋、長田幹彦、長田秀雄、平野万里、高村光太郎、石井柏亭、山本鼎、森田恒友、倉田白羊、小杉放庵、坂本繁次郎、織田一磨、伊上凡骨らが、詩人と画家、文学と造形芸術のつながりというものをもとめて、熾烈な文芸運動を、展開したのが〈パンの会〉であった。

石井柏亭が二十八才、高村光太郎が二十七才、あとは二十四五才を中心とした、青年のつどいであった。〈パンの会〉が、新らしい芸術運動の母胎となって、やがて、文学、美術、演劇というものが、けんらんたる光茫を放つ新時代にむかって、大きくはじけたのである。野田宇太郎氏の著書〈パンの会〉を読みふけったわたしは、〈バクの会〉のつどいを、〈パンの会〉のような、芸術家のクラブに育てあげたらと、いつも思っていたものである。

〈パンの会〉は、四年間で消滅したが、〈バクの会〉は、橋本喜三氏の情熱と努力によって、十年の歴史をつくった。大島支局長を初代に、徳田修氏や松浦猛氏が、支局長在住のころは、〈バクの会〉の、黄金時代であった。溝口健二氏が、講師として出席されたが「自分も会員にしてくれ。」といって、会員になったというエピソードまである。

毎回、いろいろなゲストを迎えて、勉強会をつづけた。下村良之介、皆川泰蔵、浜岡昇氏なども、後に入会した。

勉強会が終ると、京都の木屋町界隈の、バアや、名の知れた飲み屋などには〈バクの会〉の会員たちが、出没して、怪気焔をあげていた。その界隈では、これらを、バク族と

呼んでいたものである。

〈パンの会〉は、三十才までの青春を謳歌したとあるが〈バクの会〉は、三十才から四十才の青春を、むんむんするほど、発散させた。朝日新人展が、企画されたはじめのころは、〈バクの会〉で、その人選が謀られたということも、いまはあまり知られていない。

京都美術懇話会をおこし、また〈バクの会〉をリードした橋本喜三氏は、京都の芸術運動に、なみなみならぬ大きな足跡をのこしている。前後十六年、ひとすじに、京都を愛しつづけ、一美術記者として、停年まで、京都の美術界を、見まもりたいと希望していたが、停年もちかくなったころ、大阪本社の学芸部に転勤となり、〈バクの会〉の会合も、しだいに遠のいてしまった。

橋本氏が、大阪本社時代は、橋本氏の自宅に、バク族たちはよく集った。やがて停年をむかえ、京都ホテルで二百数十名の、美術関係のものたちがひらいた、盛大な退職記念パーティ「橋本さんどうする会」をもって、〈バクの会〉も消滅した。

しかし橋本氏の人がらを慕うバク族たちはふたたび〈バクの会〉を再現しようと、いっているということを聞いている。

〈バクの会〉といえば、読売新聞の藤野恒道氏が、やはり、芸術家クラブをつくりたいということで、わたしも誘いをうけた。

河原町万寿寺に、金光寺という寺がある。そこに止宿していた藤野氏は、新聞社のバックアップもなく、個人で止宿先に芸術家をあつめた。どちらかといえば、謹厳実直の藤野氏であったが、料理には、うるさかった。また、陶器の造詣もふかかった。詩人を志して、三好達治氏が、福井県の三国町橋本に、流寓中たずねて、食客となったこともあった人である。鳥海青児氏が、金光寺の住職としたしくて、よく泊りに見えた。

ときには、鳥海氏をかこんで、芸術論に華を咲かせたこともあった。西山英雄、桑田道夫、八木一夫、佐野猛夫、山本格二、岡本庄三、斎藤真成、清水洋氏なども、藤野氏のリストにのっていた。

こうした動きのなかで、田中三雄氏は、奈良の支局長として、西部本社から帰ってきたのである。大阪のバアで飲みながら、京都時代は、橋本氏をつねにライバルと思って、とびあるいたものだと、回想にふけっていた。

芸術の都、京都と呼ぶにふさわしく、京都を愛するという、固陋なまでの気勢は、なんであったか。それは、外来の文化に絶えず迎合して、日々変貌し、近代文化を呼称する東京文化に対しての、反逆と抵抗の姿勢を、かたくなに持続しようとする、京都人の気骨というものではなかったか。一九五〇年をさかいとして〈バクの会〉のような性格のグループが、続々とうまれた。そのどれもが、活潑な活動をつづけたものである。

京都を中心とする、よりよき文化、よりよき芸術の建設という意識を底流とした、歴史と伝統に生きる京都文化の、確守ということが、傾向として動きはじめて、そしてそれも、別の意味をもつ、ヌーベル・バーグの時代といえたのではないか。

天野忠氏と、田中克己氏の出合いから、コルボー詩話会がうまれた。かつての傾向、流派を超えて、詩人たちが、コルボー詩話会にあつまったのは、〈バクの会〉が、発足するより以前であった。

やがて、コルボー詩話会から〈骨グループ〉がわかれた。戦前から活躍していた詩人たちであったが、それらがひとつの郷愁にもにた、おたがいの存在をたしかめあうという、消極的な性格を、かげにもつコルボー詩話会から、より行動的に詩人の発言をもとうとする詩人たちが〈骨グループ〉をつくったのである。

この〈骨グループ〉が、活動的に、詩運動を展開し、その手がかりのひとつとして、松竹映画封切館、SY京映で、毎週朗読詩の会をひらくこととなった。ときの支配人、吉田

政弘氏から、その計画の相談をうけたわたしは、毎日新聞京都支局に、田中氏を通じて、後援をたのんだ。さいわい山本礼支局長も知っていたので、この話はすぐまとまった。

一九五七年六月一日の夜から、朗読会ははじまった。そのころ、NHKラジオで、朗読詩を放送する時間をうけもって、好評を博していた、骨同人の山前実治氏が、この朗読会では、精力的に活躍をつづけた。

「——京都の詩運動を、市民にむすびつけより広く盛りあげようと、〈グループ骨〉の同人十人が、新京極のSY京映とタイアップ、手はじめとして、同館入場者を対象に、幕間を利用して、詩の朗読会を催すこととなった。——」

という見出しで、六月一日付の毎日新聞朝刊に、大きくこれをとりあげ、くわしく報道したのは、田中氏であった。

「——SY京映の休憩時間に、音楽の伴奏の入った詩の流れは、観客をうっとりさせている——」と、京都新聞も、山前氏の朗読詩について、たかくそれを評価し、報じている。

やがて、田中氏が西部本社にうつり、吉田政弘氏が、大阪の南街劇場支配人に転任され、この朗読詩の会は、おわりを告げたが、映画館という場で、詩運動を市民にむすびつけた、進歩的な吉田氏の業績は、大きいものがあったといわねばなるまい。

のちに、京都国際会館の総務として、活躍した吉田氏は、ここでも京都の文化活動を、いや、ここでは日本の文化活動を、国際的にむすぶ役割を、アイデアにいかして、奮闘したが、血の気のおおい吉田氏は、ときの高山義三館長と衝突して、国際会館のはなやかな舞台を去った。いまは、丸善石油にいるが、会うと、SY京映時代の話が出て、骨同人のことや、詩の朗読会の思い出について、しみじみと語っている。毛利菊枝氏も、よく詩の朗読会に、聴きに来場されていたということも、吉田氏から聞いた。

この詩の朗読会がはじまったころ、夕刊京都新聞は「小話横町」という欄をもうけて、四百字原稿用紙で、三枚から五枚ものを、毎日、連載した。「小話横町」で、新聞読者も急上昇したという、途方もないしろもので、風流「L」とか、風流「M」とかの匿名で、風流滑稽譚の書きくらべを、やったのである。メンバーは、畑谷定治郎、錦織剛男、小栗美二、岡本午一、柳二郎、山本芳治郎、綾村坦園、佐々木邦彦、三田村高敏、光田作治、島岡剣石、森竜吉、鈴木宗憲の十三人であった。この十三人は、いまの夕刊京都新聞社の常務原在修氏が、まだ学芸部長のころだったので、原氏の奇抜な企画に応じて、よくあつまった。ここではくわしく書くこともできないことを、ぬけぬけと、くわだてたものである。

全国の新聞でも、めずらしい美術部を、単独に創設したのは、京都新聞であるが、その初代部長が、山田龍平氏である。

山田氏は、公平に、たんねんに、京都の美術人をバックアップしてきた。京都の美術界の水先案内として、山田氏がはたしている今日的な役割りは、じつに大きいものがある。

橋本喜三氏は、朝日新聞を定年退職して、池坊短大の教授となった。あいかわらず年齢を感じさせない、わかわかしさである。

藤野恒道氏は、東京読売新聞本社に転勤した。そのあとをついだ、高橋一男氏も、ながいあいだ美術記者として、京都の美術界につくしたが、読売大阪本社の地方部にうつった。剛毅をもって、鳴らした産経新聞の京都支局で、名物男の富永静朗氏も、大阪本社にうつってから、すっかり美術の世界より遠のいたといって、京都の美術記者時代をなつかしがっている。

田中三雄氏のあとを継いで、美術を担当した藤平信秀氏も、すでに毎日新聞東京本社の編集局次長である。「ますだ」のお多佳さんと、わたしのうちにやってきて、しぶいのどを聞かせてくれたのも、ついこのあいだのよ

39

骨 39 目次

袋はり・寒山詩調二篇　天野　忠　4
予後　依田義賢　8
銭湯　木村三千子　10
告知　井本木綿子　12
踵　荒木利夫　14
新月　杉本長夫　16
雲の中の映像　とみおか・ますごろう　18
旧居　山前実治　35
英詩の夏　大浦幸男　20
はんぱな男のはんぱな人生のはんぱな記録(4)　八尋不二　22
体重　田中克己　26
残筆記　佐々木邦彦　27
ある詩女についてのメモ　大鋸時生　32
表紙・扉　佐野猛夫

骨 39号　価 ¥200

昭和四十六年十月二十日発行

編集者　山前実治
発行者　依田義賢
発行所　骨発行所
京都市左京区下鴨泉川町五三
電話七八一―〇七九六　依田方

〔骨〕への通信及詩集雑誌の御寄贈は左記編集所宛に願います
京都市中京区御幸町御池上ル　双林プリント内　山前実治宛
電話二二一―四三八二

同人

荒木利夫　京都市北区小山東元町二六（〇七五）四九一―二四七四
天野忠　京都市左京区下鴨北園町二の九三（〇七五）七〇一―四七八七
井本木綿子　西宮市寿町五ノ四一宝山荘（〇七九八）三三一―五四三六
梅棹忠夫　京都市左京区北白川伊織町六六（〇七五）七八一―六三八四
大浦幸男　京都市左京区下鴨北園町二三（〇七五）七八一―二四七〇
大鋸時生　大阪府八尾市山本町南五の六六（〇七二九）二二一―二八二六
木村三千子　大阪市北区天神橋筋三丁目一五（〇六）三五一―七二四八
佐々木邦彦　京都市東山区山科大塚森町一六の八（〇七五）五八一―六九八三
佐野猛夫　京都市北区紫竹上芝本町三（〇七五）四九二―四二三九
杉本長夫　彦根市城町二丁目五―二八（〇七四九二）二―五〇二七
田中克己　東京都杉並区阿佐ケ谷南一ノ四〇ノ八（〇三）三一四―二七八三
冨岡益五郎　京都市左京区修学院石掛町二〇（〇七五）七八一―九五八五
西山英雄　京都市伏見区深草願成町八（〇七五）五六一―三〇四二
町田トシコ　寝屋川市三井百丈山合掌荘（〇七二〇）三二―一二八四
八木一夫　京都市東山区五条坂東大路東入（〇七五）五六一―七三八二
安田章一郎　京都府宇治市大久保町大竹二〇ノ一二（〇七七四）四三―五一七一
八尋不二　京都市左京区下鴨神殿町（〇七五）七八一―二五〇六
山前実治　京都市東山区山科川田山田一五番地四三（〇七五）五九一―八五九六
依田義賢　京都市左京区下鴨泉川町五三（〇七五）七八一―〇七九六

体重

田中克己

ソヴィエトの宇宙飛行士が滞空記録をたてて帰還を命ぜられ、着陸したら三人とも死んでゐた、といふニュースを見た。大阪の木村三千子さんといふ、これはまた骨っぽくなく、色っぽい奥さんから「骨」に書けといふ仰せをいただいた日の夕方である。彼等は宇宙ステーションで無重力状態になって、フワフワと浮いて見せ、いろいろおどけてゐる様子が写されてゐたが、地球に着く前に魂がぬけ、体だけ帰った来たのである。ソヴィエトでは「何とか英雄」の称号を贈るらしいが、天国を信じない彼等の魂はどこへゆくのだらう。ダンテの「神曲」をよんで見たがわたしにはその位置づけはむつかしい。

某年某月某日（わたしの日記にはちゃんと記してある）悪友の集まりで雑誌を出すことになり、色々よい名が出てきめかねてゐる時、わたしがまさかそんなことにはなるとは思はず、思い出を話して、「わたしはむかし骨というあだ名だった」といふと、依田さんはじめ多喜さん、山前さん、荒木さん、佐々木さん異口同音に「それが宜し」といふことで「骨」といふ雑誌出来上り、これが三十九号ださうだ。多喜さん骨となり、依田さん腸閉塞症でおならが出た由、佐々木さん高血圧とやら、皆わたしと違って立派な体格だが、わたしは中学三年の体操の時間に隣りにいた竹島新三郎といふ、名からして二枚目のエエシの坊（戦争で、家が焼け、戦後は故人名簿に載ってゐる）に「田中は骨みたいやな」といはれて、以後そのあだ名を甘受した。その時の体重四九キロ、いまはこの春の体格検査で三九キロと秤にかかったが、風袋引かれて三八キロと記入された。北支で陸軍二等兵だった時が五三キロで最高、いまは最低である。

家内はしかしわたしの体重報告を聞くと、「あなたは骨が細いから」といって一向に動じない。なにこの女は動じないのが癖で、昭和二十年三月十八日召集の電報が来ても平気、翌年三月帰還した時も平気であった。木村さん御上京の時、銀座の天金でご一緒して「も一晩東京にお泊りになったら」と申し上げると、木村さんはこの婆さんの方に目をやって、きっぱりとお断りになった。その木村さんの坊やが東大にお入りで、拙宅へお越しになり婆さんとともども歓待はしたが、トルストイ、芥川から始めて小公子、足ながおじさんまで話をおとしても、全部興味ないという顔をされたので恐縮した。お母さんと全く趣味の違ふこの秀才はもう御卒業で、一流会社にお入りになったのと違いますか。

わたしは前述の如く、骨と霊魂だけで生きてゐるが、この二つの別れる日も近く、暖くなったまま骨が出て来て、「骨」同人には見られることもなく（告別式はやりますが、その前は密葬なので）、霊魂は早く天国に招かれてゐることと信じてゐる。深瀬先生、安藤さんは多喜さんと鼎座して、今ごろ酒宴中と思ふが、わたしはそこに加えてもらへるかどうか。このごろ笑い上戸といふより歌ひ上戸、骸骨の顔をしながらナツメロを盛んに歌ふので、「来年は大学院で流行歌史をやれ」といふことになった。近況御報告かたがた（この間、大阪の雑誌に「体重」という詩を書き、原稿料もらったが、これはお読みいただいたか）「骨」の皆さんなつかしく一度ご来訪をと待ってゐます）。

残筆記

佐々木邦彦

一九六一年師走の二十六日、丸木位里氏の添書とともに、日ソ協会から、わたしあてに手紙がきた。

「――モスクワ大学の、ダビドフ教授が、一九六二年一月十日ごろ、京都を訪れるので、案内をよろしくたのむ――」

という主旨の、文面であった。

そのころ、わたしは、丸木位里氏のすすめで、日ソ協会に、入会させられていた。日ソ協会ばかりでなく。日中友好協会、日朝協会、ユネスコ、国連協会などにも、いつのまいか、ひっぱりこまれていた。

依田義賢氏の紹介で〈骨グループ〉が、アジア・アフリカ作家会議に、加盟した前後のことである。

モスクワの、ソ日協会本部から、いろいろの文献がおくられ、中共北京の、中国国画院からは「中国の国画」を、北朝鮮側からは「朝鮮文化」などが、おくられてきた。

一九六六年四月十日、川端龍子画伯が他界された。その年、青龍社展を画伯の遺志によって解散したが、それを契機に、一切の、それまで関係していた団体から、わたしは、脱会させてもらうことを、決意した。

アジア・アフリカ作家会議の、堀田善衛氏からは、長文の翻意をうながす私信ももらったが、かたくなにこばみつづけた。ユネスコからは、美術委員に、推せんされた公文書をもらったが、これも辞退した。

しょせん、人はひとりである。川端画伯の死によって、栄光のむなしさ、いわば、無常観的ともいうべきものが、すさびごととしてふかいかげりとなり、わたしの胸裡の、おくそこに、くいいってきたからである。

いや、ここでは、こんなことを書くつもりはない。

もとにもどって、書きとめておきたいことは、ダビドフさんのことである。

アレキサンダー・アレキサンドロビッチ・ヒョウドルフ・ダビドフ――このながったらしい、舌をかみそうな名の、モスクワ大学の先生は、一年がかりで、フランスをふりだしに、ヨーロッパ各国から、アメリカ、メキシコ、ラテンアメリカなどの、美術界の現状と、美術の史蹟を視察して、旅行し、一九六一年十二月二十九日、日本にやってきたのである。〈原爆の図〉をもって、レ連巡回展を催したときから、丸木位里氏とは、知人ということであった。

一九六二年一月十日ごろ、京都にやってくるというので、ともかく、案内の心づもりはしておかなければと、思っていた。

ところが、一月二日の昼すぎ、フランソワの立野正一氏から、

「東京の日ソ協会本部から、ダビドフさんは、一月三日の午後四時ごろ、京都に着くので、佐々木氏と連絡して、よろしくたのむと、電話でしらせてきたから、至急に打ち合せをしたい。」

と、あわただしく、電話でつたえてきた。

とりあえず、立野氏を訪れて、この会ったこともない、異邦人の、京都での案内を協議した。

が、ダビドフ教授は、美術視察が目的らしいのである。案内のスケジュールをきめたところで、そのまま運ぶかどうか、まずは、会ってから計画をたてても、おそくはなかろう

42

骨 42 目次

ヨーロッパ　天野　忠　4
影　他一篇　依田義賢　6
むすめ　井本木綿子　8
諦める　木村三千子　12
老人の語り　とみおか・ますごろう　14
虚心　他一篇　山前実治　23
英詩と肉　大浦幸男　10
絶望　立ちはだかる世界へ　大鋸時生　15
ソ連の旅　八尋不二　19
表紙・扉　佐野猛夫

骨　42号　価　¥200
昭和四十七年九月十日発行
編集者　山前実治
発行者　依田義賢
発行所　骨発行所
京都市左京区下鴨泉川町五三
電話七八一一〇七九六　依田方

〔骨〕への通信及詩集雑誌の御寄贈は左記編集所宛に願います
京都市中京区御幸町御池上ル　双林プリント内　山前実治宛
電話二二一一—四三八二

骨

43

骨　43　目次

佐々木邦彦追悼
知らなかった教師邦彦・依田義賢　4
佐々木さん追悼・田中克己　5
佐々木邦彦のこと・天野忠　6

英詩と死。大浦幸男　8

ソ連の旅（下）・八尋不二　10

西山英雄詩抄。西山英雄　14

手紙・（当番あ）　17

送電塔・荒木利夫　19
とみおか　ますごろう・ファンタジィ「落花」　20
天野忠・遊園地にて　22
依田義賢・眉毛他一篇　24
井本木綿子・まわり舞台　26
木村三千子・風土他一篇　28
山前実治・峠　30

骨 43号
昭和四十八年三月二十日発行
編集者　山前実治
発行者　依田義賢
発行所　骨発行所
京都市左京区下鴨泉川町五三
電話七八一一〇七九六　依田方
価　¥200

〔骨〕への通信及詩集雑誌の御寄贈は左記編集所宛に願います
京都市中京区御幸町御池上ル　双林プリント内　山前実治宛
電話二二二一一四三八二

知らなかった教師邦彦

依田義賢

今年はことの他きびしい冬だという気象台の予報がてんであたらなくて、暖い新春、この日は雨もよいで、昼の四条通りが夕暮のように暗い、河原町西の府のギャラリーへゆく。十六日から、佐々木邦彦の素描展が開かれているのである。二階へ階段を上る。三方に見渡される、山の絵。窓側の床几に、知り合いの奥さんと話していた、佐々木君の奥さんの富子さんが、来かたがおくれた詫びも聞かずに喜んで迎えて下さった。骨の同人のこの展覧会への好意への感謝をこめてであった。佐々木君がのこしておいた、スケッチブックにしるした、沢山の山の素描を、追悼の心をもって展覧しようと、同人の画家の西山英雄兄、染色家の佐野猛夫兄が相談して、このギャラリーで相談するのへ、八尋不二さんも加わって、案内状のことなどとりきめた。山の素描は昔からのものから、晩年のものまで、沢山あったが、その中から、西山兄が選り、佐々木君の落款それぞれの画の適当の場所を見つけて印し、額縁もきめるなどの骨折りをして、色づく山や白黒の山、山容・大小など、見事に、組み合わせ、三面の壁面に飾ってくれた。さすが、と、その構成の巧みさに感心する。御岳の姿が目をひいたが、遠望してみると、素描のなみなみならぬ巧まさが、わかった。そして、二三の重畳たる、ひろがった山脈の画は、京都府が京都の有数画家たちに依嘱した、京都百景の一つとした、山の画家を自負する、邦彦が撰んだ、大江山の風景のスケッチであった。彼がこの大江山を抜渉していた時、すでに病魔は彼の体内にひそんでいたのだろうか、山にのぼる前頃から高血圧症に悩んでいた。いや、高血圧と思い込んでいたが、癌性の潰瘍がはじまっていたのではないだろうか。大阪の画塾に通うのも少しえらいようなことを、その頃、久しぶりに骨の例会に来た時、洩らしていた。（骨の例会はたいてい土曜日なのだが、その日が彼の画塾の指導日であったので、例会にはずうっと来られなかった）大江山の絵も苦しい中から仕上げ、堀川会館という公立学校の共済組合の会館にかかげる、夜明けの山と霧海の大きな画面も仕上げた。大変な意欲ぶりだった、「可哀想なぐらいでした、いまから思うとよけい、その気持が」富子さんは、涙ぐんで、私に話されたが、もうそれで、仕事を休み、入院して、休養し、なおるつもりであった。再起不能とは知らないで……。なんという残酷な病だろう。天野美津子君をも奪った、癌は、佐々木邦彦をも仆してしまった。

暑い夏の最中であった。酷暑の佐々木君の邸宅の葬列には、骨同人は彼の先輩、子弟たちと立って、四百名の人々の弔慰をうけた。棺が出る時、庭前に、成っている、みどりのぶどうの一房を、棺に入れてあげてくれと、苦労人の荒木利夫君が云った。このぶどうの実になるのを待っていたが、今年なったと喜んでいたということだった。

初七日の晩に、骨同人と親しい仲間が、彼のてれた顔した写真をかこんで、霊を慰め、酒をのんだ。スケッチの一部はその時、見せ

てもらったものであった。

佐々木君が、ケロイドの頬の詩を書いた頃は凄まじいような魂をもっていて、山もおそろしいほど猛々しく、聳えたっていた。その時、彼の家庭に不幸がつづいた。そして結果は破局に終った。彼の懊悩のすべてを私は知らない。だから、何もいえないが、そうした悩みを救ったのは富子さんであった。彼はそれから、明るくなり、仕合せそうになり、あづさ君が生れると、三才児からの実験教育とばかり、その偶然の画才を記録させて、その天才ぶりを喜ぶ、親馬鹿ぶりは、たわいないとはいっていられなかった。青龍社御大の死去、その解散、そうした苦労をなぐさめてくれたのは、あづさ君の成長であっただろう。しかし、そこに焦燥も見られ、たしかに、見苦しい感もあり、心ある友人たち、骨の同人諸君も、痛いくらいに彼を責め、彼の仕事への精進を望んだ。負けずぎらいな彼には、きびしい鞭であったことだろう。しばらく彼は骨を遠ざかった。そうして、少し、いけないなと思うような状態が、ふと止ったように見えた時に、彼の意欲的な個展が梅田画廊でひらかれた。これはおどろくほどではなかったけれども、私どもは、彼のために、賞めそやした。彼はそれを喜んだ。たしかに、昔の力のよみがえりは見られた。それからの彼は、画塾の子弟たちを率いて、解しかねるような、若々しい画壇への、斬込みのような活動をしたりして、人を驚かしたが、彼が病に臥してから、死ぬまで、日夜、彼を看病した、萠芽会の若いお弟子たちの話をきき、姿を見て、彼の人格のえらさをはじめて知る心持ちであった。お弟子たちは彼の言動をなつかしみ、それに教えられたことを、話し合うのを知ると、彼は得難い教師であったと思った。彼が師を失った時、直ちに、師になればよかったのではないだろうかと、今思ったりしている。

佐々木さん追悼

田中克己

「骨」結成以来十何年、同人がだんだん本物の骨になるというので、縁起をかついで毛沢東文字と同じく左へ曲げる新字を佐々木さんが書かれ、めでたしと思っていた。夏休みに待兼ねていた長女が孫二人をつれて里帰りし、二十年間かかっている佐々木さんの「西山」の画幅を見ながら、「新聞に佐々木さんが亡くなられたと出ていたよ」という。「骨」が出来たとき中学生だったので、よく覚えていたなと思う反面、見そこないだとも思った。八月なのに「骨」同人誰一人、親切な木村三千子さんさえ報して下さらなかったからである。そこで考えあぐんだあげく、小高根二郎氏に問合せると、依田さんが委員長となった葬儀に参列したとしらせられ、ふしぎにも同日、奥さんから満中陰のおしらせをいただいた。やっぱり本当だったと嘆息絶句した。

佐々木さんには好いていてもらったと思う。「西山」以外に画を沢山いただいているし、山科のお宅にも泊めていただいた。何とも恐縮ながら愛息にわたしの子どもと同じ名をつけていただいたことがその一番の証拠である。わたしを好く人は珍らしいが、佐々木さ

んは人に好かれた。イナガキタルホ氏と宇治の小高根邸に会した時、佐々木さんが便所に立つ。ついでタルホ氏が立ってしばらくすると佐々木さんがちょっと顔色をかえて「今タルホ氏に挑まれた」という。小高根君やわたしなどには魅力がなく邦彦画伯には男をも魅する力があったのである。このことは奥さんもご存じないだろう。

東京でも青龍展のある時は必ず招かれ、個人展になっても呼んでいただいた。必ず見に行って「いいな、日本一だな」と感心して見ていた。その一回、佐々木さんが挿画をかいた「運命の島々」という本をよんだ直後で、徳之島守備隊においでだったことを始めて知り、「台風の島の守りにつきし人いまは山々美しく描く」という歌をサイン帖に記した。御本人からそんな話は一回もきかず、「骨」の同人中、兵出身はシベリア抑留の多喜さんと北支派遣軍のわたしとだけかと思っていたのである。この歌に対する感想は早速「骨」三七に佐々木さんが書かれたので、「気持は通じた、一回ゆっくり兵隊の悲哀を話しあおう」と思っているうち今度の悲報であった。広島の原爆についての詩は「コルボオ」におのせになって傑作であった。「原爆の図」で有名な丸木位里御夫妻にも展覧会でご紹介を受けた。天才の梓君の「つくしんぼうのつんちゃん」「さるのキャッちゃん」などはわたしの孫の愛読書になっている。御遺族の上にくれぐれもお幸せあらんことを東京にて祈っている。

佐々木邦彦のこと

佐々木邦彦と私は同年である。一九〇九年（明治四十二年）の生れである。同じ年生れが四人寄って、四二会（死に）をやろうじゃないかと変な気勢をあげたことがある。その四人は、私と佐々木邦彦の外に、依田義賢と杉本長夫であった。深瀬基寛さんも健かで盛んに盃を干していた、白沙村荘での骨の会のときである。

その「死に会」の会員の一番初めに死んだのが佐々木邦彦になった。頑健という感じではないが、いつもふくよかに肥えて血色のよい頑張りやだった。陽気で人あしらいの上手な頑張りやだった。よく飲みよく稼ぎ言葉遣いの穏当な頑張りやだった。腕力に任せて縦横に働いたといったふうである。

天野　忠

「私は誰々さんのように、ちゃんとした生活費は勤め人の給料で賄い、その上で安心して絵を画いているのとはちがいますから」と、昂然と云い放っていたのを覚えている。絵だけで喰っているんだと、腕ッ節をニュッと見せられた気がした。

その腕力とは裏腹に、その絵はたいへん行儀のよいしずかな山の絵が多くて、普通のメシを喰っている私共風情の茶の間にでもうまくおさまるような、おだやかな性格の、しかもどこか感傷的な絵であった。絵の上手下手を云うよりさきに、いつ見ても、京都弁でいうほっこりするような抒情詩のような作品であったが。

下鴨に居た時分、前の奥さんが本屋の店を出し、佐々木邦彦は二

階の広い二部屋をアトリエにしていた。一方の作りつけの大きな書棚には岩波版の固い哲学書を初め、所謂一級品の、しかめっ面をした書籍がぎっしり隙間なしに並んでいた。それを見ただけで、「高邁」な識見を蔵したえかきさんというふうに見えた。しかし気立ての良い謙虚な人柄らしく、いつも言葉遣いのおだやかで、ニコニコ顔をしていてあいそがよかった。ああいう、でっぷりと、いかにも豊満な感じのからだつきの人は、えてして人触りの良い、しかもこまかく気の働く人が多いらしい。悪口でなく裏ばなしふうのことで、評判の高い人の批判をかなり手酷しくやったりすることが得意で、そういう時は、依田義賢が巧みに表現したように、「でで ッ」とヘドロみたいな嘲笑い方をした。あれには何か、虚飾を剝ぐときの一瞬の凄惨な気合のようなものがあった。その時は別人の観があった。

私の手許に、きれいなガリ版刷りの「ひよんの実」第一集がある。昭和二十六年二月一日発行だから佐々木邦彦四十代の初めである。これの序文代りにこんなことを洒落れのめしている。

——　枕草子より

第百一段　いみじくもおかしきもの。むつかしうに説きわたりたる。ほ句のみち。ついぢのくづれ。

第百二段　たのもしきもの。談林。貞風。犬筑波はさらなり。まして。ねお談林。ねお貞風。ねお犬筑波などは。すきずきしくあはれなることなり。それもことわり。

邦彦

「ひよんの実」の清興の同勢は七、八人で、この小冊子も二三冊貰った記憶はあるが、何号まで続いたものやらはっきり知らないが当時の邦彦才幹のほどを一寸紹介してみよう。（四十代というのは誰にとっても曲者の時代のようである）

木瓜過ぎて花見の酒の座に居据る
（註—ぼけなくとも居据りらしい）

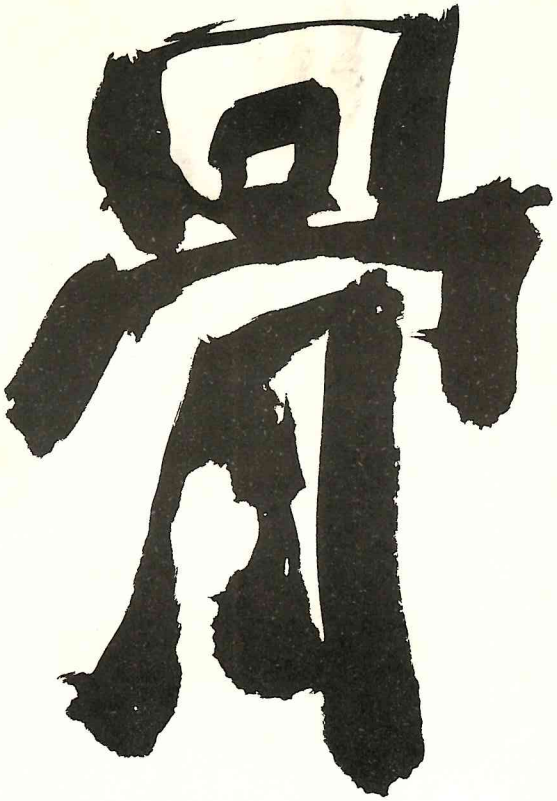
残る借り冬までまてと雁渡る
（註—借り渡る粛条風景の一断面）

機織虫（はたはた）と幟ひらめく村祭り
（註—はたはたとひらめく幟ばたばたと）

糸繰れる織子は何の蜘蛛もなくて
（註—糸、織、蜘蛛、三題噺苦もなくて）

後朝や手を肩掛けて別れけり
（註—きぬぎぬ？　絹絹？）

佐々木邦彦は、四二会の中では一番頑強に生き残る人だと、実は私はそう思っていたのである。杉本長夫は、多種多様の病気と格闘中であり、依田義賢にしろ胸の方の深い病歴があり、私にしても前二者とほど遠くない病歴を重ねていて、目下も複雑な薬餌に浸っているあやふやな状態で、決して彼等の埒外ではない。佐々木邦彦が入院したと聞くまでは、同年でありながら、ほとんど一年中山野を跋渉し、画きまくり稼ぎまくる同君が羨しく憎たらしくてならなかったぐらいであった。その頑張りやの大将のような「若い」佐々木邦彦が、「でで ッ」と嘲笑い声を残して死んでいった。死んだということは千万無量の重みだ。その重みの中へはどんな言葉も消えていくだけである。



44

骨　44　目次

杉本長夫・悪夢　4
木村三千子・今日もよく売れている　6
井本木綿子・無明　8
天野忠・疑問　10
とみおかますごろう・湯どうふの弁　12
山前実治・整　13

英詩と雨・大浦幸男　14

杉本長夫追悼
杉本長夫氏追悼・田中克己　16
杉本さんの持味・木村三千子　18
哀悼杉本君・山前実治　19

『丶一噺』をかけめぐる・大鋸時生　20
いいわけ・安田章一郎　22
さみだれ日記・八尋不二　23

表紙・扉　佐野猛夫

骨 44号　価 ¥200
昭和48年8月20日発行
編集者　山前実治
発行者　依田義賢
発行所　骨発行所
京都市左京区下鴨泉川町53
TEL781－0796　依田方

〈骨〉へのお便りは下記編集所宛にお願いします
京都市南区西九条東島町53(油小路九条下ル)
〒601　TEL681－8033　山前実治方

杉本長夫氏追悼

田中克己

「骨」に書くのは追悼ときまってしまい、大変なさけない。杉本さんがお悪いといふのは第三代（？）の詩人学校校長（初代は井上多喜三郎氏）をおやめになったので、びっくりしてお見舞状をさしあげたが、返事なく、彦根の諸友からも病症、病状ともにしらせられず、亡くなられたのは天野忠さんの「骨に書け」ではじめて確認した。

日記をひっくり返すと、杉本さんとの初対面は彦根の短大をわたしが止めるときまったあと、昭和二六年一月三一日、彦根の市中でぱったり詩人中川郁雄君に遭い、滋賀大学の杉本先生が会いたがっていらっしゃると聞き、すぐさま失礼承知の上で、中川君に案内してもらって芹川提を大分あるいてお宅へ伺ふと、御在宅だった。奥様もおいでで初対面と思えないほど話がはずんだ。それも道理、杉本さんの書斎には朔太郎の写真がかけてあり、これはわたしがシンガポールへ行ってる時、朔太郎さんが亡くなられたとの通知を受け、わたしの言い置いた通り、家内がお葬式に参列し、お香奠返しとかでいただいたのと全く同じ写真だった。わたしの頂いたのは某君がわたしの二度目の留守（華北派遣二等兵）中、懐に入れて持ち歩いていた由だが、某君は発狂入院、写真もどこかへ行ったままになった。そんなわけで朔太郎の詩から始まり、滋賀大で十二級一号俸（当時いく円だったか篤志の方は調べて下さい）、奥さんは人形造り？がお上手とて作品見せていただき、また芹川の堤をぶらぶら歩いて帰った。二人がほぼ同年で、京城から引揚げて来られたとかで話が尽きなかったが、わたしの彦根在住はあと二月ほどで、その後、三月八日、「やりや」（お嬢さんは宇田良子さんといふ詩人、この間、詩集を出された）での詩人学校の送別宴には御出席いただき、散会のあと九時半ごろご一緒して帰宅した。

実は杉本さんはむかしわたしの属してゐた「四季」がお好きで、その第二二号（昭和一一年一一月号）に「かむるち」と「城壁」の二篇を発表しておいでだった。「四季」は昭和四二年に複刻されたが、お気づきでない人もあろうかと、この二篇を写してみよう。

かむるち

かむるちは佗しき性なり
黄濁の暗き水底
ひとり佗ゐ鋭く腹這ふ
やきつくる業の炎の
ことさらに激しき眠
淵に寄り　影に隠れし
斑なる醜くき姿
水底は光も落ちず　魚族群れず
彼の血に潜む性を圍周り
濁水の冷たきばかり　流るゝばかり。

（注）かむるちは朝鮮の河沼に棲ふ頭部蛇に似たる淡水魚なり。

杉本さんは「朝鮮文学」の同人といふので、この号の編集に当った津村信夫か神保光太郎のどちらかが投稿を依頼したのである。佐藤清先生に師事した英文学者として、象徴詩のようで難解だが、かむるちという醜い半島特産の魚にご自身を比しておられるような気がする。尾崎秀樹の「植民地文学」といふ本が出た由だが、この雑誌やこの詩人のことは記されているかどうか、わたしはまだ検するひまがない。次の一篇は少し趣を異にしていて

城壁

時の吹き荒した歴史の跡
淋しく秘められし傅説の
一片の石塊にも刻まれてありなん崩ほれし城壁の
ただうねうねと続きたる。

李朝の城址だろうか、写生ではあるが、亡国の怨恨を敏感な詩人がくみとって歌っているように思う。

日記を検すると、わたしはそれから一年たって彦根にゆき、一年だけ教えた学生の卒業式に列し、翌日、彦根の正法寺町の円満寺（詩人の小林英俊和上が住職だった）の近江詩人会に出席した。杉本さんもこの詩人学校に御出席で、午后五時までの会のあと急いで帰阪した。これが昭和二七年三月二一日のことで、序でながらしるすと、三日あとの二四日には、わたしは河内長野の病院に伊東静雄氏を見舞ひ、「このごろ死者のことばかり考えています」と詩人の最後のことばを聞いた。杉本さんから最後に聞いたことばは何だったろう。

（ここまで書いたところで、「詩人学校」の杉本さん追悼号が着いた。同時に五月二〇日円満寺で小林和上の十三回忌を兼ねた例会の由である。彦根なつかしく、行きたいと思ふがわたしは老残、ゆけさうもない。）

わたしは日記を検して、杉本さんと最後に会ったのは昭和三七年二月一八日だったことをやっと見つけた。思えばもう十年以上会っていないのである。この年九月には「呪文」が出版されるのだが、杉本さんは詩の話より、会合の場所、朝鮮料理の「新橋苑」といふのが気に入った様子で、松の実の粥とスープをわたしと家内が美味だといふと喜んでおいでで、そのあと朔太郎を好く理由を話されていたが、しばらくすると「気分が悪い」といって横になられた。わたしたちはおろおろして、大丈夫ですかと心配しながら酒饅頭をみやげに買って帰宅した。英文学会かの上京で疲れておいでだったろうが、時間を割いて会って頂いたのもうれしく、秋の「呪文」出版、お送りいただいたあと、毎月いただく（二十何年つづいている）「詩人学校」の校長先生としての作品もなつかしく拝見していた。校長を辞任退職されたのはいつか、御病気は何だったか、くはしい報せもないまま、わたしたちは幽冥境を異にした。もっとしつこいお附合をすべきだったとくやまれてならない。あと十年近く、わたしは東亜の民俗学を講ずるが、半島の民俗を講ずるたびに杉本さんの詩の素材にふれ白衣の国をなつかしく思い出すと思う。

杉本さんの持味

木村三千子

〝待つほどもなく　あなたは来た
　鋸屑の床を飛ぶように〟

京城の歯医者のぼんぼんだった杉本さんが奥さんとのデイトの場所であった喫茶店の様子をうたった詩の一節で、私の好きな詩の一つである。

三月九日の夜、杉本さんのお通夜にかけつけた私は、奥さんから最後のもようを聞きながらこの詩を思い出していた。

「本当に静かで苦しまない臨終でした、眠っているうちに魂が抜け燃えつきてしまい、サヨナラも言ってくれないんですよ、あっけないといったら」

言葉のはしばしにまで匂うような魅力を持った美しい奥さん、まじまじと眺めながら杉本さんの磨き上げた芸術品の傑作を見る思いであった。（じゃサヨナラと云って手でも握られたら、それこそタエられませんで）

杉本さんの持味に始めて接したのは、彦根市郊外の晒山にあった滋賀大官舎（杉本さんの自宅）での近江詩人会の例会の時だった。

二十年以上も前のことである。

その頃の近江詩人会は、井上多喜三郎、小林英俊、杉本長夫、武田豊のそれぞれ個性ゆたかな四本柱に支えられて、若い会員も多く活気のあるグループだった。

例会は菓子をつまみ、茶を飲みながら、ガリ版刷りの会員どうしの作品を批評しあう。

各自の前に菓子が配られた直後の事だった。

若い会員がその中の一つをつまみ上げて杉本さんの方を向き、「先生、貝ですネ」杉本さんは無言でニヤリ。

こういう事が気易く言えるせいか杉本さんは学生間でも人気バツグンだった。

サックドレスが全盛の初夏の頃であった。

杉本さんの京城時代の友人であり、「詩声」で同門の由の川端周三さんをさそい出して大阪の一夕を楽しんだ事がある。

たいして　飲めないのが三人、わづかな酒でいい調子になり、御堂筋をヒップの品定めをしながらブラついた。

そうして、「いづれにしてもサックはよくない」の結論に達したが、時間もまだ早いし御堂筋の西側にネオンの並ぶホテル街を探訪しようという事になった。

中の設備も行き届いているだろうと構えの立派な所へ入り、

「三人でもいいか」と聞くと、「たまに来はります」

「アホラシ、私がごっつうオーセイみたいやないの」と私。

「気にするな、一人はカメラマンだ」と杉本さん。

部屋の設備といってもグルッと見まわせばもうオシマイ、戸を少しあけて入ってくる客を眺めていたら案内係に叱られた。

かといってもする事もなし、このまま出るのも損するようだし、むし暑い日だったので「男性がたはお風呂へ入らはったら」と提案した。

「風呂の匂いなんかさせて帰ったらそれこそ」と顔色を変える川端さんを残して杉本さんは風呂場へ消えた。

ステテコ姿で出て来た杉本さんを見て驚いた、胸から肩にかけてガッチリと筋肉がつき逆三角形のいい体つきは、ジョロンとした洋服姿から想像も出来ない程である。私が「ここぞと云う時には早めに脱いではりましたんやろ」とほめ上げると、杉本さんは「わかったか」と得意げで学生時代に陸上でならした話というフロクがついた。

その後、滋賀文学祭の懇親会の折に、私がしゃべった「杉本センセはエエ体してはりまっせ」がだいぶん誤解を招いたらしい。

最後のお見舞となってしまった時のことだが、奥さんが席を立たれた折に、「あんなすばらしい奥さんを残してお先になんぞアキマヘンで」と言ったところ、杉本さんはストマイつんぼ用の補聴器をカチャカチャさせながら、「若い時はもっとキレイかったし――よかったぜ」と歯を出してニーと笑った。

下半身不随でも杉本さんの持味は変らなかった。

哀悼　杉本君

山前実治

杉本長夫兄がとうとう逝ってしまった。なんといい友人がつぎつぎいなくなることよ。灼熱地獄のようにおもえるこのごろのぼくはただ感無量で、ことばにはできない。

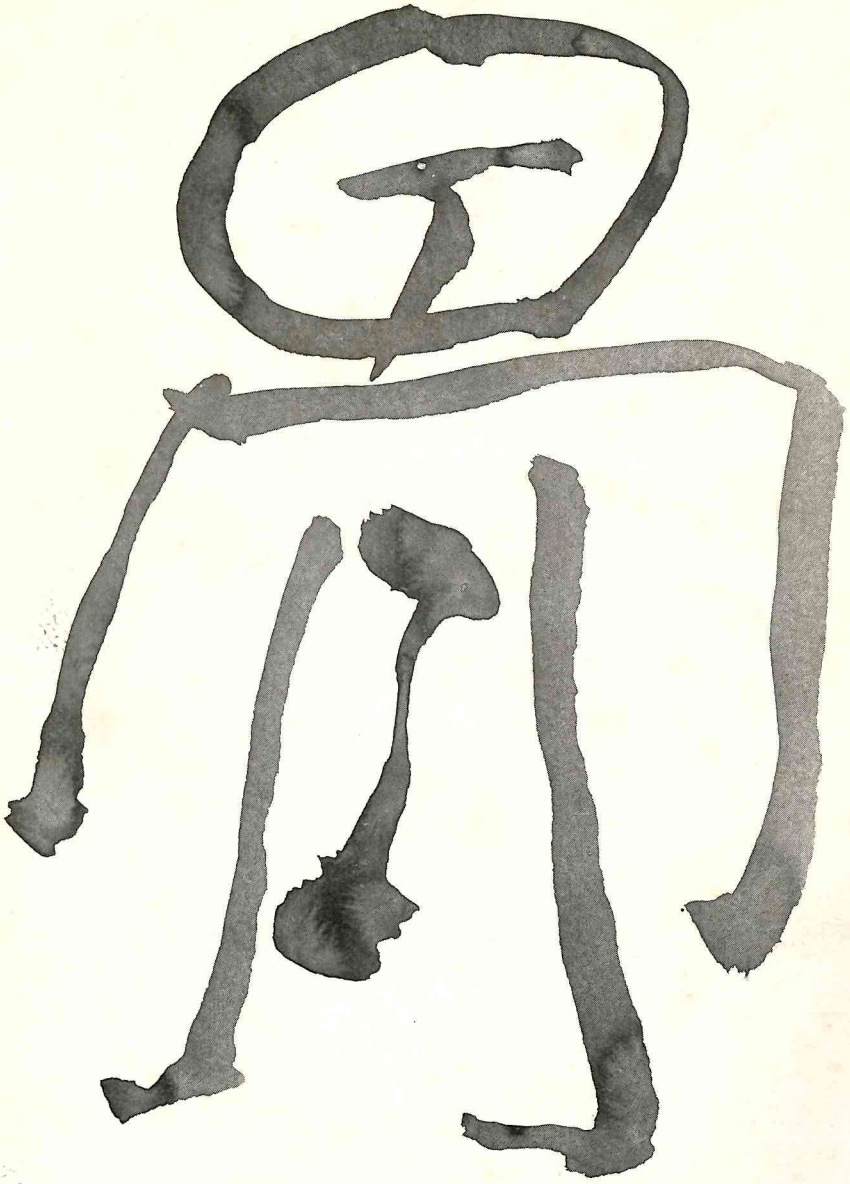
昭和43年6月発行「骨」30号杉本長夫君のＰｒｏｆｉｌｅ「呪文の杉本長夫君」というぼくの文章に

――１９６２年上梓した詩集呪文の格調高い健康な作品に、「鳥」がある。整然としたスタイルは紳士でケレン味のないのがいい。すこし細かすぎる程の気遣いが、きにならぬでもないが、それはそれでいいと思う。――

――杉本さんにあらあらしさや、飛翔を期待するには、あまりにも緻密に詩語にみがきをかけすぎるきらいがないでもない。そのいいくせは、ぼくの独断から察すると、英文学専門の大学教授にありがちのことらしい。もう十七八年もむかしから、ぼくの野人的言動に合致して気安くことばを交わす親友だが、詩についての論議をしたことはない。今この小文を書きながらどうしたことかと思った。五六年前から躰の調子を害ねているのが気になる。健康をとり戻せよ。――

と、記しているのだから、ずっと十年程は病院にでたりはいったりのありさまだった。

「一年七ヵ月の入院でした」と未亡人がおっしゃった。哀悼。



47

骨 47 目次

表紙・扉・佐野猛夫

北京のくろっきい・依田義賢 4
旗日・天野忠 8
兵火・牡丹・井本木綿子10
何のために・木村三千子14
憬・踪・山前實治24

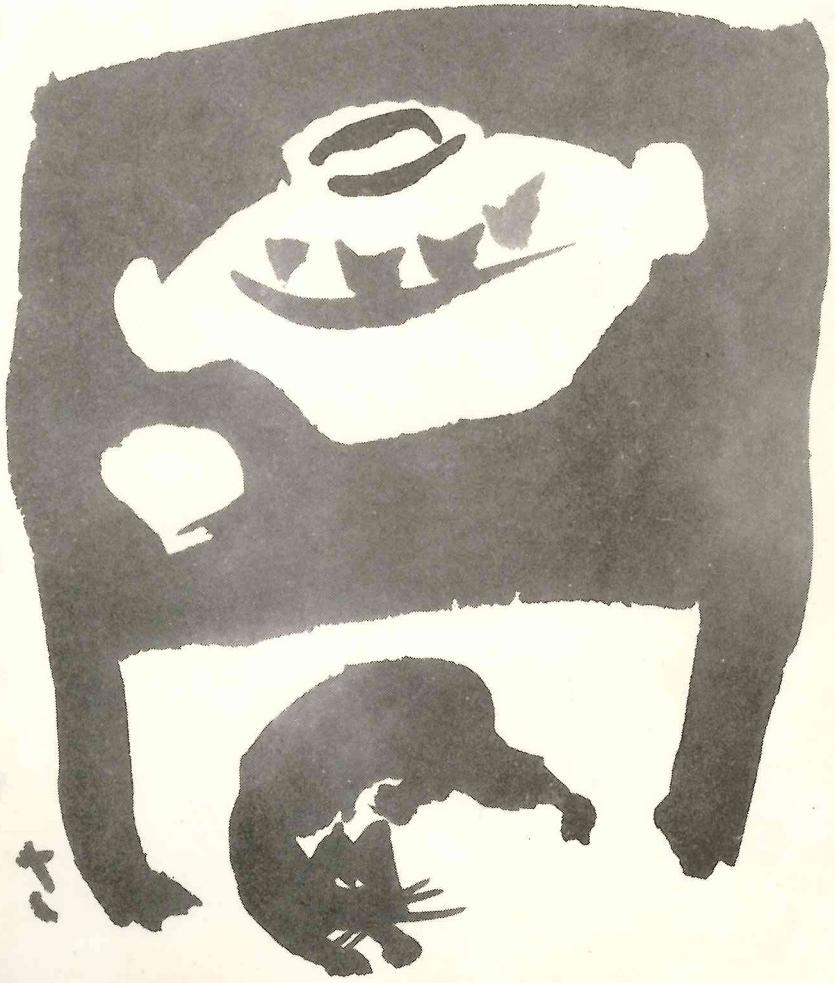
英詩田舎・大浦幸男16

飛驒ふたたび・八尋・荒木・大浦18
あやかりたし・田中克己21
めくじら日記・大鋸時生22

骨47号　　価 ￥２００
昭和49年10月20日発行
編集者　山前実治
発行者　依田義賢
発行所　骨発行所
京都市左京区下鴨泉川町５３
ＴＥＬ781－0796　依田方

〈骨〉へのお便りは下記編集所宛にお願いします
京都市南区西九条東島町53(油小路九条下ル)
〒601　ＴＥＬ(075)691－0315　山前実治方

冐 47



飛騨白川郷遠山家にて

御母衣ダム地下発電所入口にて

飛驒ふたたび

一

昭和四十四年八月三十一日。八尋不二・荒木利夫・大鋸時生の男三人、朝もやをついて飛驒・白川郷に出立。九月二日。高山を経て帰る。蓋し、山前実治とその一族が里帰りせしに便乗し、山峡に、わびを求めんとせしなり。この地、人情こまやか。酒食またすぐれ、男三人、ことごとく悦喜。法楽の思いあり。来年も行きたいもんや。こんどは骨の仲間を根こそぎ拉致しようや、なぞ……云々。

――というのは、五年前の本誌に、大鋸時生が書いた「男三人よれば」という飛驒紀行の一節である。なかなか要領のいい文章である。

さて、昭和四十九年六月三十日、骨の仲間根こそぎ、という訳にはいかなんだが、前述の顔ぶれに、大浦幸男、木村三千子、井本木棉子の男一人女二人を加えて、前回同様、山前実治の先導で飛驒再訪となった。つまり、五年たてば倍になる、という勘定である。

しなの五号を岐阜で乗り捨て、ここから三時間余の国鉄バスの旅となる。車掌S君、奇特の人にて、沿道に桜樹数千本を植え、もって客の目を楽しませんとす。サービス精神また頗る旺盛にして、

〽郡上（ぐじよう）の八幡出て行く時は……

と郡上節を皮切りに、ありとあらゆる民謡を唱ってきかせ、ついに惣則の惣領息子たる山前お得意のこだいじんまで、引き出して唱わすことに成功した。

やがて降りしきる雨の中、牧戸に下車、山前実家へ直行する。五年の歳月は、釣橋変じて鉄橋となり、四辺の様相は一変したが、山前母堂は九十才にして、猶かくしやく、更に老衰の色なく、一行を驚嘆せしめた。

小憩の後、御母衣ダムへ案内され、地下数百米の心臓部を見学、その雄大にして精緻なるメカニズムに圧倒される。そのあと遠山家を訪れ、大白川温泉に廻ること、前回同様のコースだが、前には路傍に堀立小屋を建て、誰でも無料で入れた湯が、今ではチャンと料金を取り、現代風の軽薄な安普請の温泉旅館も何軒かできている。ま、それも御時世ならば仕方があるまい、と横目で「明日金髪ヌード出演」などのポスターを眺め、荒木大人（うし）など、何やら立去り難き風情であったが、とにかく、その夜は民宿中島に一泊と相成る。

あらかじめ註文してあったので、料理は山菜一色、女あるじの志、ありがたし。されば飲むほどに酔うほどに、みなみな御満悦、外は高原の夜の雨いよよ冷たきも、内は駘蕩として春爛漫の趣あり、夜の更けるも知らず、いやはや、おとこおみなの呑むわ呑むわ。

ようやく各々の部屋に入って就寝の段となっても、酒呑童子荒木と、悦竹斎大浦は、興未だ尽きざる風情にて、両名隣室にこもって、更に献酬を重ね、喋々喃々、その声或いは高く、或いは低く、いつ果つべしとも思われず、眠りがたくぞあるに、何事ぞ、傍に臥したる大鋸大鯨氏、突如、鯨の汐吹く如き鼾声を上げて我を驚かす。かく左右より狭撃され、あわれ、一睡もせぬ間に、無情の夜は明けにけり。

早朝、山前・木村は仕事ありとて帰路につき、われらは再び降り止まぬ雨の中を高山さしてのバスの旅となる。

海抜千米の軽岡峠にかかれば満山の万翠雨に煙って一幅の南画を観るが如く、途端に実業家の素面となった荒木

「ええとこやな。ここら坪、何ぼするやろ」

「へ、三万円ぐらいだっしゃろ」

「けど、熊、出えへんかいな」

「そら出ます」

という問答あって荒木沈黙。僕は（熊付き三万円）は安いと思ったが、然し、あまりにも人里離れ過ぎていて、すぐに巷の紅灯が恋しくなる俗人の僕には辛抱できそうもない。

かくて、バスは下りとなり、次才に高山は近くなって来た。

八尋不二

二

白樺の皮の表紙が、三十篇ばかりの詩を暖かく抱巻いている。そういう詩集を私は持っている。寒冷と、少しでも和らげようとする陽の弱い光と、清らかさの中で育ってきた白樺の皮を、故郷の飛驒の父から送られた山前実治が、それを使って昭和十二年に出した詩集の「飛驒」である。

雨後の飛驒のさわやかな山峡の緑の樹々の間に、白樺の白い幹が見える。このあたり熊や狐が出たと、まばらなバス乗客の飛驒老人の、半分自慢の案内話を耳にしながら、窓外の緑を見ていた。この道は越前街道だ、信濃から越前へゆく道だ、とも話してくれた。標高約千米の街道。今迄見た地図では、この道を白川街道、飛驒街道、或は高山街道、のどれかを使って記されていたのを覚えているが、越前街道という呼び方は初耳だ。道の呼び名は地域社会が物と人の交流の重点目標をどこに向けているか、によってそれぞれの自然の合意で固まるのだろう。

高山市内に入る二キロ程手前の、飛驒民族村を訪ねた。この日七月一日は、この村の開設記念日、何となくよい日に来たような和みを覚える。本日入場無料の、村の入口の建物は切妻合掌造りだが、間取りは荘川造りで、白川造りへ移つてゆく姿が遺った貴重なものの由、荘川村出身の山前君同行でなく、同君の説明が聞けないのは惜しい。この一画に数戸の建物が寄合っており、地蔵さんも列んでいた。ここから七八丁奥まった山麓の飛驒の里へ馬車で向った。馬といえばテレビで見るだけで実物には縁遠くなったが、この春、京大農学部北端に小じんまりしたグランドがあり、学生が馬を調練しているのを暫く見物したが、その細い脚の馬とちがって、わが馬車を曳く馬は、比べようもなく見事な巨大な尻を私らに向けて、うつむいていた。馬方さんは、高野山の馬車とちがって、御車台に乗らず手綱をとり馬と並んで歩いてゆくので、馬の巨大な尻をさえぎるものはなかった。馬にとっては迷惑らしい立派な舗装の滑りやすい上り坂を、パコンパコンと一きわ高い脚音で、確実に踏みしめて、馬は私達を運んでくれた。もりもり動く巨大な頼もしい尻に感心している間に、飛驒の里に着いた。感ずるところ一入だったらしいのは井本君、乗車賃を払うとき「馬に何か買ってあげて下さい」と余分の金を添えて馬方さんに言っていた。馬にチップをやる人を初めてみた。

飛驒の各地、越中に近い北部、東北部、中部、東部、又美濃に近い南部から、特色のある古い民家をこの飛驒の里一画に移築し、民族博物館的な趣きで保存が計られていた。飛驒といってもいろいろあるのだなあと想う。建物のそれぞれの戸口に、元の住人の家名、建物の在った所、建物の特徴等を書いた板が掲げてある。豪雪、風に対する身構えがひしひしと感じられる家々だった。かや葺屋根の鋭い角度、板屋根の重し石、太い材木、丈夫な骨格、これを結合固着させる縄、そして生活の規則を守らせる間取り、日々の仕事の用具、これらを目のあたりにできることは有難い。

或る戸口に「八月一日家」と書かれていた。今日七月一日は記念日だし、八月一日に何か行事があるのかとふと思った。何と「八月一日」は「ほずみ」と読む名字だった。「野首家」という薄気味わるい名字の家もあった。ここは土間が広く、土間にいろり火があった。太い材木が腰をおろせるように二本置いてあった。わらじを脱ぐ間も惜しい農民の、江戸初期からの土座生活の様式が続いていたのだ。土座生活式の田家もあったが、地主のものか立派すぎた。田家に関して、山前君の詩集「飛驒」に触れたい。「かっこ鳥」といういい詩がある。

田家にきて
火を焚くマッチのにほひ
八千八こゑ啼かねば
虫一匹めぐまれないといふ

ではじまる二五行ほどの詩、かっこ鳥と共に作者は喉を切らして悲痛に啼く。この詩の註に、田家とは田地が遠いため田の畔に建てた小屋のこと、この小屋で昼飯、お茶休、小昼をやるのである、とある。

大きな家だった、間口十三間、代々庄屋さんだったという家の縁に赤もうせんが敷かれてあり、そこに坐り、思いがけずしずし現われた身仕舞のよい婦人方より薄茶を接待された。貴公子然の大浦氏が気に入られたのか、大鋸氏の大人的偉容が、威を払ったのか、と思ったが、今日は民族村記念日、裏千家流の方々のおふるまいであった。

高山は昔から茶道の盛んなところらしい。高山城主の金森一族から茶人金森宗和が出ており、城主金森氏は、京都の伏見桃山に別邸を構えてきた。私の長女が桃山に住んでいるので知ったのだが、桃山一帯は、豊臣の桃山城の城下町で、大名や武将の名をつけた町名が沢山あり、その一つに「桃山町金森出雲」というのがある。金森氏は「出雲守」が多かったことを読んだから当っている。金森氏は高山城主になって、高山の町づくりに京都のそれを取り入れたようだが、町家の外観、作法芸事、其他自づと京都風に馴染むことが高山では多かったのだろう。

高山の街では、先づ国分寺に行った。千二百年の樹令の大樹を仰ぎ八尋氏の説明を聞いた。幹や大枝からふくらんできた乳房が勢余

って長々と空中垂下するさまの垂乳であった。呑めるものなら吸ってみたいと言えるものでなく、亡き母の垂乳のみを偲んで本堂を拝んだ。門の傍に円空彫師の小房があり、ここでひととききょろきょろ皆んな見廻した。

荒木利夫

三

二番打者の荒木氏、懇切丁寧なる旅行記をものせるも、第二日の半ばにて途中下車。引きついで、ぼくが后半を急行ですませることにする。

国分寺から市内循環バスにて日下部民芸館、ついで八幡社境内の屋台会館へと向う。高山は小京都というから、どうせ京都の二番煎じだろうと、タカを喰っていたら、どうして大したものだ。飛騨の匠の手になる重厚な建築、また高山祭の屋台にしても、祇園祭の山鉾をも凌ぐすぐれた工芸品だ。

午后四時、今夜の宿、三之町の久田屋へ到着。かねて待望の旅人宿である。ただし、ガッカリしたのは「酒類は夕食にのみ、酒一本またはビール一本に限る、部屋では出しません」という貼り紙だ。午后五時半より宿泊人一同、老いも若きも一室に会して食事。酒二本、ビール二本を三人で分けあう。（井本君よ、有難う）山菜また頗る美味。

食后宿を出て、本町筋に赴き、殊勝にも土産を買う。それより宮川の橋上にて涼を取る。宮川は高山の鴨川と称するが、清流には鯉・鮒群りて遊戯し、その風情鴨川に勝ること数等である。折りしも、橋上より飛騨の山々夕焼けに色づくをみる。ぼくのごとき詩趣を解さぬ無風流人もしばし立ち去りがたき思いであった。

ただし、宵闇迫れば酒と女が欲しくなる不良老年のこととて、男三人「きぬ芳」の支店を探して裏町を歩く。「河童」なる民芸調の酒亭あり。地酒「豊年」をコップでグイグイとやる。サカナは焼き茄子が殊に美味。それに、カスリを着た高山乙女がまた仲々良い。大鋸大人に彼女ねんごろに握手する。「軟い手ね」と言われて、ペンしか持ったことのない大鋸老いたく感激する。荒木大人も至極満悦、夜半まで呑みたき風情であったが、久田屋の門限が午后十時とて、やむなく一同その直前に宿に帰還する。

しかし、十時に就寝では酒呑童子と悦竹斎の名がすたる。が、そこは、さすが荒木大人の凄腕か、人徳か、久田屋主人の説得に見事に成功。主人自らビール三本と土地の漬物を運び来ると、大鋸老はすでに布団を被って寝ている。主人曰く「もう寝ておられますがな」ビールを一本持ち帰りかけたので、ぼくは慌てて、「いや、すぐ起きるよ」と、必死にとどめる。

ビール三本がなくなると、鞄にしのばせてきた酒、ウィスキーを次々と補充。かくて、御清潔な旅人宿での酒宴は声をひそめてえんえんとつづくのであった。高山の夜は深沈と更け、時折り聞えるは、犬の遠吠えにも似たる大鋸老のいびきと、隣室に臥せる井本女史の寝言のみ。

翌朝は午前七時、例の「いろりの間」にて一同会食。待望の「朴葉味噌」が出る。ここで再び、荒木大人の辣腕、久田屋の鉄則を曲げて、朝食にビールを出さすのに成功。かくて、ビール四本を主に二人で呑んだ。宿酔の朝のビールを、朴葉味噌を肴にして呑むのは何ともこたえられない。

朝食后、朝市へ行く。ぼくは昨年輪島の朝市へ行ったが、それに比べると小規模だ。朝市の近くに代官屋敷「高山陣屋」がある。ぼくは最近テレビで「遠山の金さん」を愛好しているが、実物の白州がここにある。北町奉行・荒木守御出座あって、見物の若き女性数人を白州に坐らし、即席の吟味が始まる。双腕ぬいだが、桜吹雪の入墨がなかったのは残念至極。

久田屋へ帰り、荷物を取って、まず高山駅に行き、切符を買い、荷物を預ける。それから、タクシーで照蓮寺、民俗館を巡る。

昼食は、一行中三名は「えびす屋」なるそば屋にてザルそばを食べる。朴葉を敷き、その上にそばが盛ってあり、まさにほんものの、そば、最高の味である。殊に、地酒「山の光」と共に味わうと実にすばらしい。ところが、大鋸大人のみは例のツムジ曲りで、独り脱出。高山産のマグロのトロを賞味したとか。彼は長生きするよ、ねえ。

それから高山駅へ行ったが、まだ時間があったので、荒木氏と共に春慶会館へ行く。ただし、春慶塗りは高過ぎて手が出ぬし、生憎美女にも出遭わず、収獲なし。

午后二時五十八分発の急行「高山一号」にて一同無事（悪疾にもかからず、悪女にも引っかからず）出発。そのまま事もなく、わが家へ帰るつもりだったが、生憎向い側の座席に坐っていたのがカワイ子ちゃん二人。荒木氏とぼくという名うっての不良老青年二人、これを見逃してはわれらの名がすたるとばかり、チョコレートやら、弁当などを物々交換。そのあげく、見事に二人を「きぬ芳」の奥座敷まで誘い込むのに成功した。かくて、飛騨行は有終の美を収めました。

大浦幸男

あやかりたし

田中克己

物事をやるのものろくなったのも老年のせいだろう。八尋さんにお返事かいてぼやっとしていて、今日はわたしの六十三度めの誕生日、あさっては台湾へ行くので、筆をとりあげても一度、八尋さんのおたよりあけてみたら「二十日まで」にとのことであった。間にあわねば切腹ものだと思いながら書きます。

「時代映画と五十年」出版をかねた古稀のお祝に日生会館八階ホールへ参り受付にサインして入場してみると驚いた。みな七月三十日の炎暑にきちんと上着とネクタイ、あたりを見まわしたが知合もいない。わたしは冷汗を拭いながら、初対面の八尋さんをあれかこれかと想像していた。やっと開会、司会者は誰だったか五所平之助、稲垣浩などわたしの名だけ存じている方々が次々に御挨拶なさる。

白状するがわたしは時代映画というのは見たおぼえがない。このご本は大変な勉強になったが、思えば中学生の時、今の東大阪市（当時小坂）に帝キネという映画の撮映所があり、その女優の潮みどりというお姉さんがわたしの家の二階に間借りしておいでだった。

この会社は大日本帝国より先につぶれて、男優では市川右太衛門さんだったかがおいでだったが、潮みどりなんて覚えておいでなどなかろうな。さて次は（中学校は映画館入場禁止で見つかったら停学である）高校で「アスファルト」という映画を新世界で見たのが病みつきになり、いまもリリアン・ハーヴェーの「会議は踊る」の主題歌をドイツ語でそらで歌える。このごろはテレビの西部劇を見おわってから入浴して眠るというしきたりになっている。ただ一度だけ「日本映画における東洋的なもの」という卒論をかく男学生が黒沢明を中心にというのでやむなくこの天皇映画を三本見、卒論はまあまあ「可」と採点して卒業さしてやった。

ただしそんなことを申上るためではなく、わたしは「骨」の同人で「京の酒」というありがたい本を書かれ、安藤真澄の追悼詩、多喜さんの追悼詩をお書きいただき、しかも「酔うたきげん」さんはもとより多喜さん、どまん中の天野忠さんの右隣りは伊沢蘭奢のむすこ故伊藤佐喜雄そっくり、左はしはにこやかな荒木利夫さんである。田中内閣のおかげで日中復交はありがたいが、わたしは一向お呼びがかからないので、自費で単身台湾へ参りますが無事は当然だが、元気で帰国したら、秋ごろ八尋先生にあやかりに京都へ参ります。わたしの横でサイン入りの「京の酒」見た嬢ちゃんらしい人、「あらわたしも欲しいわ」とたしかにいった。とも角わたしは匆々にしかし御対面かなったうれしさで帰宅いたしました。（昭和四九年八月卅一日誕生日午前一時書了る）

御撮影の写真ひは

かもえるさて

余録

同人の著書（左記）が最近2年間に続々出版されたのを肴にして、去る6月15日四条大橋東「菊水」に於て同人だけで記念会の集りをした。

大浦幸男「イェイツ」（'72・7・15）、依田義賢「祇園、一噺」（'73・1・31）、大鋸時生「ぼく・大鋸時生の実存について」（'73・3・2）、天野忠「余韻の中で」（'73・7・30）、富岡益五郎「中井正一アフォリズム」（'73・11・8）、佐野猛夫「染色入門」（'73・11・10）、八尋不二「飛鳥の王の王」（'74・3・5）、依田義賢「むみやうのすみか」（'74・4・29）。

また、去る8月11日京都ホテルで、八尋不二のシナリオ生活五十年と（時代映画と五十年）の出版と（古稀）を祝う会を約百五十名集りの盛大な祝賀会が催された。

50

目　次

画・佐野猛夫　3・43

像　荒木利夫　4
砂漠のノート　依田義賢　7
この頃は　木村三千子　12
落日　井本木綿子　14
骨灰　山前實治　16
首つり　天野忠　18
山上の墓地　田中克己　21
日録―ぼろ靴の風懐　とみおか　ますごろ　22

天野美津子　蠅・凧　23
井上多喜三郎　暮しの歌　24
深瀬基寛　睡眠中のファンタジー　25
佐藤辰三　写真　2
安藤真澄　川口港　26
佐々木邦彦　ケロイドの頬　28
杉本長夫　樹・カンナ　31

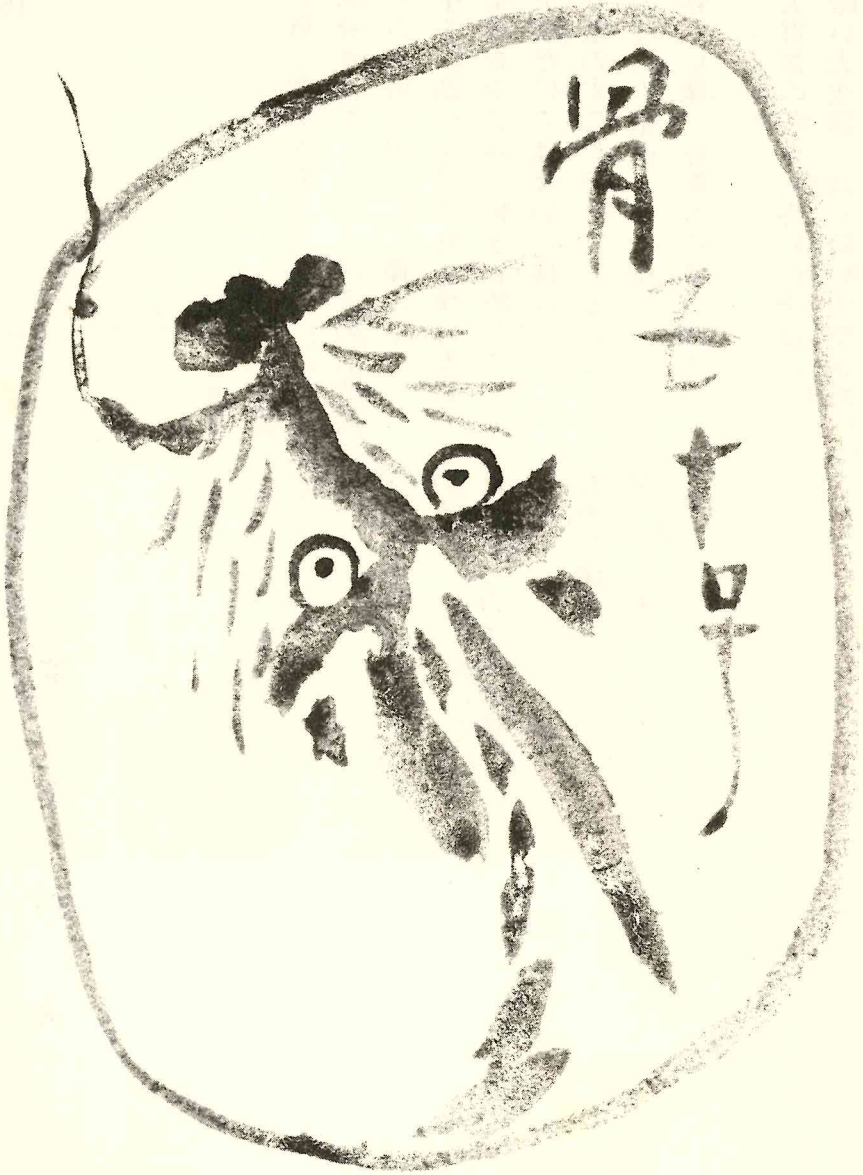
英詩と五十号　大浦幸男　32
めぐじら日記　大鋸時生　34
老年の悦楽　八尋不二　36

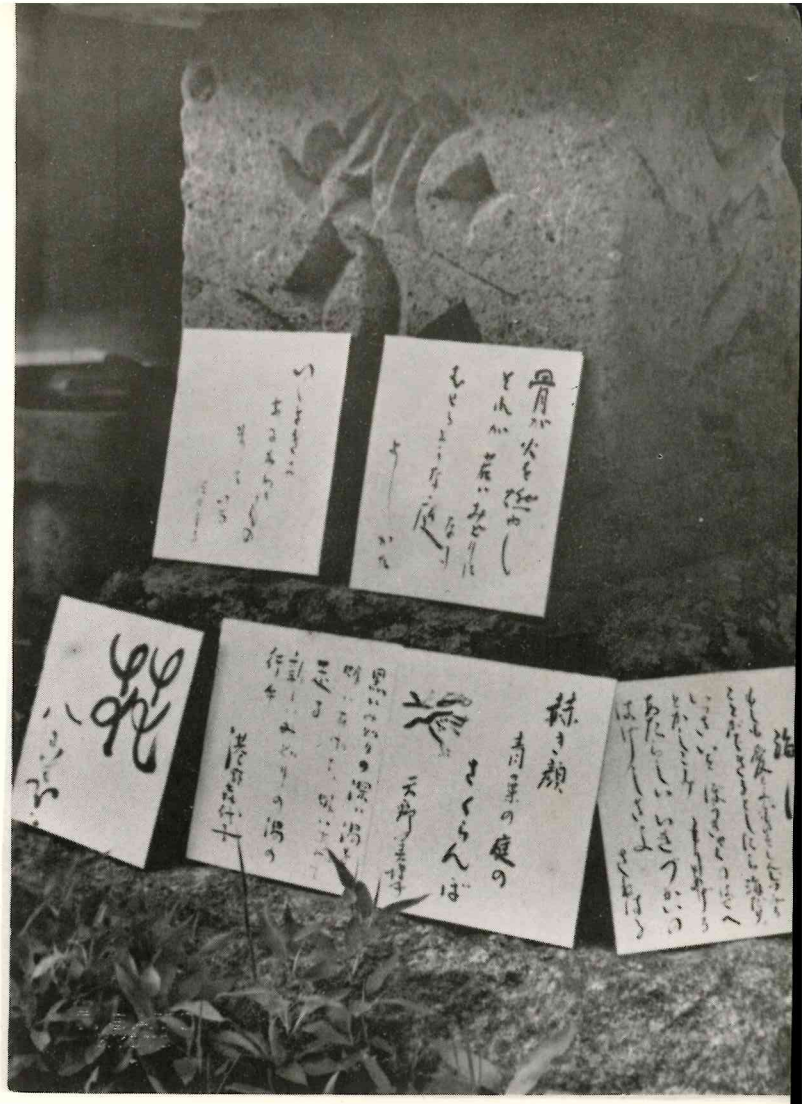
骨50号概略録　山前實治　37
〈骨〉詩作品・総覧　（山前編）　39

表紙題字　佐々木邦彦

骨50号　　価 ￥２００
昭和51年２月20日発行
編集者　山前実治
発行者　依田義賢
発行所　骨発行所
京都市左京区下鴨泉川町５３
ＴＥＬ781－0796　依田方

印刷・有限会社双林プリント・京都市南区西九条東島町53
・TEL075-691-0315





昭和36年秋　白沙村荘にて　骨の集り寄せ書の一部
撮影　佐藤辰三

老年の悦楽

八尋不二

富士正晴の例の如きスイデン（銘酊、陶然として人恋しくなり、卒然としてかける電話を謂う）あり、どんな話を交したのやら、ほかのことは少しも憶えていないが

「あんたの葬式にはいかへんよ」

というのだけが耳底に残った。

去年は彼も肉親や友人を次々と失い、その傷心のほども察しられるが、もともと彼は人の集る所へ出るのが嫌い、特に葬式などは、一番の苦手らしい。

その点は僕も全く同感なのだが、僕は彼と違って、いたって人づきあいの良い方なので、できるだけ出ることにしてはいるが、近頃はやたらと人が死ぬので、どうかすると一日に二つも、たまには三つもカチ合うことがあり、何のことはない葬式の廻しをとることさへある。

ま、葬式はそんな風で仕方がないが、これが病気見舞となると、話が違う。相手が可愛いい女だったら別だが、男性だったら、絶対に僕は見舞いには行かぬ。相手の病苦のさまを見るのは辛いことだし、見舞われる方でも男なら、弱っているところ、或いは老醜恍惚の態など、断じて見られたくない筈である。

恍惚といえば、僕も$\ell+\alpha$坂をこえたら、ひょっとしたら恍惚の境地に到達できるかも知れぬ、とひそかに期待していたが、どうやら僕みたいな凡俗のやからでは無理なようだ。

恍惚の老人を、僕は無残とも、あわれとも思わぬ。ひとが何と言おうが、おのれの思念の中に悠游できるとはまことに結構なことではないか。

恍惚の境に味到できないとなると、僕は創作三昧に没入するしかない。五十年の余も映画の世界に居て、いつも枠の中の仕事をしていた僕は、いつかは枠を取っ払いたいと思っていた。映画は所詮監督の仕事である。シナリオ作家で出発した奴でも、本当に自分の仕事をしたいものは、監督か、その監督を使うプロデューサーになる。若いシナリオ作家は、僕のことを功成り名を逐げた人、という部類に入れているということを聞いたが、僕自身は、シナリオ書きなどは、男子一生の仕事ではない、と思い続けて来たのである。

古稀を過ぎて、やっと僕は枠の外へ出ることが出来た。いつかも書いたが、五十近くになって、初めて青春期を迎えた僕は、今が丁度、男ざかり働きざかり、身心ともに爽快で、思ふ存分好きなことが出来るのである。

これからは好きな仕事だけしかしない。あれもしたい、これもしたい、とやりたい事は山のように溜っているのに、新しく取っ組みたい仕事は後から後から、滾滾と湧いてくるのである。

若い時は五十年も生きれば沢山だと考えていたが、この分では、あともう五十年ぐらい足さないと、やりたい仕事は捌き切れないようだ。

仕事だけではない。旅もしたいし世界中を、駈け廻りたい。いい絵も欲しい。美酒も美人もみんな欲しい。だが、何といっても、好きな仕事を気ままに出来るというのは何のいう有難いことか。

いや年はとりたいものだ。まったく。

昭和28年秋　骨創刊の頃
左より荒木利夫、田中克己、井上多喜三郎、依田義賢、山前實治、佐々木邦彦

骨50号始末概略録

山前実治

とにかく〈骨〉50号をかさねた。概略をしるしておく。

創刊号は昭和28年11月10日発行。28年8月木屋町三条のれんこんやに、依田義賢、山前実治、田中克己、佐々木邦彦、荒木利夫、井上多喜三郎（創刊号の順序のまま）が集った。——ふと、うかんだまま同人六名が一致して名付けたのが、「骨」だ。

何につうじてゆくか。それはこれから発表する作品が示すことで、ここでいまさらとり立てて、主張めいたことや、こと新しいことは構えない。

敢えて言うならば、涸渇しやすいのはゼネレーションの熱情だ。いろんな分野で自分の個性を生かし、それを生かすことが、大きい流れとなって一つの力となることを、いちだんと重視するのだ。とともに、真実を探求する一員であることのプライドをたかめ、プリミティブなものをさぐりたいとねがうことが根底の一つともなれば、それは、それでいいであろう。（略）と私が編集雑記に書いた。

——骨の〔音〕はコツ、コチであり〔訓〕はホネである。〔解〕の内「骨」に通じるもの。○ほねぐみ。骨骼。外部の装飾を除きたる中心。○物事を支持する主能。○極致。○風采。度量。○剛直にして妄に人に屈せざる意気、気骨。主旨、主意。である。僕達は各

々の骨の在り方を示すことが目的である。

佐々木邦彦君が描いた表紙の骨の字には「色気があるね」って笑ったが、宇津保にも「ほね舎利の中よりも、甘き乳ぶさは出で来なん」との名文がある。

若い骨は太るのだが
太らない骨を削って生きている

僕達である。詩人を貧困に苦しめるような、この国の政治は賞められないが、僕達はせめてエスプリの骨だけは太らせたいと、パッションをかたむけているわけだ。

と多喜さんも雑記に書いた。

昭和24年5月、京都在住の安藤真澄、間司恒美、天野隆一、半井康次郎、天野忠、佐々木邦彦、城小確（本家勇）、田中克己、児玉実用、俵青茅、小高根二郎、依田義賢、久滋徹（大西卯一郎）、山前実治等が相寄り、コルボウ詩話会を結成した。趣意書は私がずいぶんとまじめひとすじにきおい立った文章を書いたことをおぼえている。毎月活発な批評会をひらいた。昭和27年7月、36集までテキスト作製、会計いっさいの世話をしたが、すこしばかりの意見の相異に気づき、36集を最后として脱会した。つづいて田中克己も脱会した。当時帝塚山学院大学教授として大阪の徳庵にいた氏を訪ねたおり、二人で雑誌をだそうという話をしたのを、依田、佐々木両名がききおよび、さらに井上、荒木両名の勧誘参加、理想的な同人数六名でB5判創刊号がでた。

昭和31年6月発行、第11号までB5判で、必ず同人の作品が載せられた。第12号からは装をA5判とし、多喜さんが編集に細かい神経を使った。

同人は号をかさねるとともに相当数の参加をみたが、深瀬さんのように、「おもしろそうなあつまりだから、おれもいれろ」といわれて、「それではオリジナル作品を」といったら、「睡眠中のファンジィ」を書いてこられ、参加された。または詩はかかないが、〈骨〉の会合で、しゃべっていることに意気があうから参加する。といって仲間になった方たちも、一応は同人一同の意思が一致したうえでのことだ。同人のうち一人でも反対意思があったら、それは尊重して、参加してもらわなかった著名な方も一、二はあった。

第11号から深瀬基寛、西山英雄、冨岡益五郎、昭和32年8月発行第12号から梅棹忠夫、佐野猛夫、昭和34年3月発行第15号から天野美津子、大鋸時生、町田トシコ、8月発行第16号から桜井武雄、佐藤辰三、橋本喜三、昭和37年2月発行第19号から天野忠、9月発行第20号から八尋不二、昭和39年10月発行第23号から安藤真澄、杉本長夫、昭和43年6月発行第30号から大浦幸男、昭和43年11月発行第31号から安田章一郎、昭和44年3月発行第32号から井本木綿子、昭和45年6月発行第35号から木村三千子、昭和50年10月発行49号から古家晶のみなさんが参加した。そのうち同人名簿に記載しなくなった方たちは、橋本喜三桜井武雄、梅棹忠夫、町田トシコのみなさん四名。そして物故者、天野美津子（昭40・2没）、井上多喜三郎（昭41・4没）、深瀬基寛（昭41・8没）、佐藤辰三（昭43・2没）、安藤真澄（昭43・6没）、佐々木邦彦（昭47・7没）、杉本長夫（昭48・3没）の七名。それぞれの追悼号をだした。

昭和33年3月発行13号から、同人のProfileを寫真は依田義賢撮影、同人一同がそれぞれの観点を書いた短文を載せた。

〈骨〉の例会は毎月一回。集れば酒を飲む。ときには誰にも知らさないでテープをかくしどりした。意図してテーマをきめた座談会をテープにおさめた。33年8月発行14号「日本語と詩」。34年3月発行15号「関西語と詩」。41年1月発行25号「骨放論」等々。しかしそれを整理するのには相当の努力と粘着力をしいられた。まったくひとりがてんではあるが、繁雑においたてられながら、そうすることが当然のことのように、惰性化したものだ。賢明な者にはあほらしくてやりきれまい。

〈骨〉詩作品・総覧

1号 28・11・15

片つぽの指が　荒木利夫
なめくじ　山前実治
ローマの匂い　依田義賢
決潰口他一篇　佐々木邦彦
茅屋　田中克己
流れについて他二篇　井上多喜三郎

2号 28・12・31

魚の町　井上多喜三郎
十二月の歌　荒木利夫
岩の上にも花がさく　山前実治
アラビアの砂漠と
　ペルシヤ湾の海と他一篇依田義賢
山の宿　佐々木邦彦
縣城　田中克己

3号 29・2・10

アルバムから　田中克己
冬夜　荒木利夫
コメットについて　依田義賢
声　佐々木邦彦
稚語
初戎他一篇　山前実治

4号 29・3・15

壁　田中克己
死んだ恋人　井上多喜三郎
節分他一篇　佐々木邦彦
冬日他一篇　田中克己
犬　井上多喜三郎
或る肖像　山前実治

5号 29・5・30

二つの男の像他二篇　依田義賢
ドブネズミトイウ　山前実治
眼　佐々木邦彦
戦友に　田中克己
その眼を　荒木利夫
被爆魚　井上多喜三郎

6号 29・7・15

米の歌　荒木利夫
花　山前実治
憤り　佐々木邦彦
ミロのヴィナス二題　依田義賢
無題　田中克己
決意他一篇　井上多喜三郎

7号 29・9・5

歯　井上多喜三郎
墓碑　田中克己
無題　佐々木邦彦
米　田中克己
ニケの像他一篇　依田義賢
鋸の歌　荒木利夫
歸って来る　山前実治

8号 29・12・25

ローマの夏の夕暮に　依田義賢
海老蟹　井上多喜三郎
坊ッ子と詩　小高根二郎
問と答　田中克己
なんでもない　ひびき山前実治
暗い天　佐々木邦彦
シャベルを　荒木利夫

9号 30・4・30

そばかす他二篇　田中克己
さばく　山前実治
へんな日記　安藤真澄
水路他一篇　荒木利夫
トリイトンの像の前で
　他一篇依田義賢
夜の詩　佐々木邦彦
地熱の詩　井上多喜三郎

10号 30・10・30

花他四篇　山前実治
カタコンベ他一篇　依田義賢
戦後十年　佐々木邦彦
現代風景　田中克己
羽蟻　荒木利夫
犬他一篇　井上多喜三郎

11号 31・6・20

鳥　荒木利夫
目　山前実治
睡眼中のファンタジィ深瀬基寛
その時　依田義賢
その手　井上多喜三郎
影　佐々木邦彦

12号 32・8・10

睡眠中のファンタジィ深瀬基寛
習作他一篇　冨岡益五郎
むかでながやI　山前実治
ない　ジョン・プドニーふかせ・もとひろ
人形町附近　荒木利夫
不安　佐々木邦彦

玉葱の歌　依田義賢
新雪他一篇　井上多喜三郎
手紙　佐野猛夫

13号　33・3・1
運命　佐々木邦彦
雨の夜曲他二篇　冨岡益五郎
メルヘン他二篇　依田義賢
鈴他一篇　天野美津子
むかでながやⅡ他二篇　山前実治
彼岸他三篇　井上多喜三郎

14号　33・8・1
東京点景　冨岡益五郎
むかでながやⅢ　山前実治
新宿　依田義賢
小鳥と木と花と　佐々木邦彦
蚯蚓他二篇　井上多喜三郎

15号　34・3・20
新宿Ⅱ　依田義賢
雨期二篇　天野美津子
屑籠の中から　冨岡益五郎
柿　荒木利夫
挽歌他四篇　井上多喜三郎

16号　34・8・20
不確かな季節他一篇　佐々木邦彦
日曜日他一篇　天野美津子
或る日他一篇　冨岡益五郎
ネオンサイン　依田義賢
鎖他二篇　井上多喜三郎
小景　杉本長夫

17号　35・7・20
連祷　依田義賢
夜　井上多喜三郎　屑籠拾
屑籠拾　冨岡益五郎
退屈　天野美津子
炎天の日のしずく他一篇　山前実治
挽歌他一篇　佐々木邦彦

18号　36・3・20
群　依田義賢
にんじん他一篇　天野美津子
非情　佐々木邦彦
ある日やさしい人が動物園へくる他一篇　天野忠
カタカナ　ノ　ウタ四篇　山前実治
山羊の歌　井上多喜三郎
骨のあるおばあちゃん　山前実治

19号　37・2・20
十一月　荒木利夫
出発他一篇　山前実治
孝子伝　天野忠
八他二篇　井上多喜三郎
鴨他二篇　天野美津子

20号　37・9・10
ツタンカーメン　依田義賢
一市民の勤勉生活　天野忠
古い家　天野美津子
飛驒山脈　山前実治

21号　38・1・10
豪傑　天野忠
糸の世界他二篇　天野美津子
ペニイ銅貨　八尋不二
霜にとけたちちいろのあけび　山前実治

22号　38・12・1
燈台　天野美津子
音楽を聞く老人　天野忠
俗　井上多喜三郎
わたしは黙祷　山前実治
ぎおん阿呆陀羅経　依田義賢

23号　39・10・1
白い花他二篇　安藤真澄
彷徨のはて　杉本長夫
桃の花他一篇　天野忠
病院で他二篇　山前実治
活他二篇　井上多喜三郎

24号　40・7・10
作品　西山英雄
北の海他二篇　安藤真澄
墳他七篇　井上多喜三郎
神話他一篇　杉本長夫
隠れ場所　天野忠
蠅他一篇　天野美津子

25号　41・1・10
悪性感冒ビールス戦線　町田トシコ
砂漠のノート　依田義賢
挨拶他一篇　天野忠
北の国他一篇　安藤真澄
袋他三篇　山前実治

26号　41・6・10
井上多喜三郎追悼号
遺稿詩　春調・豚　井上多喜三郎
悲しみと怒りも虚無に　田中冬二
多喜三郎さんに　石原吉郎
飄飄の多喜さん　児玉実用
〝死者の中の死者〟のために　大江満雄
水中花　荒木二三
多喜三地蔵　河野仁昭
現場で　大野新
母屋と倉とその間で　武田豊
悼詩　本家勇

近くで　田中克己
悼詩　安藤真澄
老蘇ノ人　荒木利夫
昭和四十一年二月二十六日天野忠詩友井上多喜三郎氏の死を悼んで　杉本長夫
間　山前実治

27号　41・11・20
春の湖　安藤真澄
風他二篇　杉本長夫
砂漠ノートⅡ　依田義賢
金魚他一篇　天野忠
切実他一篇　山前実治

28号　42・6・25
日録　冨岡益五郎
ルフトハンザで　八尋不二
霜の朝他一篇　町田トシコ
北方の人　安藤真澄
こなゆき他一篇　杉本長夫
生活他二篇　山前実治

29号　43・1・25
舞台劇　天野忠
袋をいだいて　山前実治
砂漠のメモ・風について　依田義賢
詩三篇　杉本長夫
日録　冨岡益五郎
父祖の埋没　町田トシコ

30号　43・6・25
樹目の目・邂逅　杉本長夫
日録　冨岡益五郎
古い空気　天野忠
隧道にて　依田義賢
いたそこに　八尋不二
拒否他一篇　山前実治

31号　43・11・15
熊笹　荒木利夫
蜜柑　天野忠
顔　冨岡益五郎
怠惰なとき他二篇　杉本長夫
安藤真澄と忘れ物　依田義賢
抒　山前実治

32号　44・3・20
住居　天野忠
日録　冨岡益五郎
窓　依田義賢
火口にて　杉本長夫
鶴　荒木利夫
抒　山前実治

33号　44・8・25
消耗　町田トシコ
梅雨の記　依田義賢
簡易食堂で老人がうたった　天野忠
日録　冨岡益五郎
落葉　井本木綿子
北海　荒木利夫
かぜのはげしさに　山前実治

34号　45・1・25
日録　冨岡益五郎
犬他一篇　依田義賢
病む　杉本長夫
姥捨　天野忠
古風な休止符他一篇　山前実治

35号　45・6・20
見当山　山前実治
きついやつ　荒木利夫
春寒二題　依田義賢
後生　天野忠
地下鉄　木村三千子
日録　冨岡益五郎
眼覚め　井本木綿子

36号　45・10・20
向日葵のこころ他一篇　杉本長夫
動物園にて　依田義賢
秋が来る他一篇　木村三千子
無題　冨岡益五郎
岩魚釣　山前実治
求心の心シィディ・ルイス　安田章一郎訳

37号　46・2・20
仏舎利塔にて　町田トシコ
雪　依田義賢
鳥辺野にて　八木一夫
行方他一篇　天野忠
朝他一篇　荒木利夫
私記録　冨岡益五郎
訪問　杉本長夫
女　木村三千子
冬　山前実治

38号　46・6・20
散歩　八木一夫
この春　依田義賢
ある風景　木村三千子
過去帖　冨岡益五郎
心中未遂　天野忠
どくだみ　山前実治

39号　46・10・20
袋はり他二篇　天野忠
予後　依田義賢
銭湯　木村三千子
告知　井本木綿子

踵　荒木利夫
新月　杉本長夫
雲の中の映像　冨岡益五郎
旧居　山前実治

40号　47・2・20
醒メル　依田義賢
花冷え　井本木綿子
揺れる年令　木村三千子
酸素について　天野忠
点綴録　冨岡益五郎
十一月　荒木利夫
口伝　山前実治

41号　47・6・10
日常の譜　冨岡益五郎
みつめる　天野忠
恐れる　木村三千子
天然水　依田義賢
天秤　井本木綿子
雲雀　荒木利夫
証他一篇　山前実治
じいちゃんのるすばん八尋不二

42号　47・9・10
ヨーロッパ　天野忠
影他一篇　依田義賢
むすめ　井本木綿子

諦める　木村三千子
老人の語り　冨岡益五郎
虚心他一篇　山前実治

43号　48・3・20
富士抄十篇　西山英雄
送電塔　荒木利夫
ファンタジィ「落花」他一篇　冨岡益五郎
遊園地にて　天野忠
眉毛他一篇　依田義賢
まわり舞台　井本木綿子
風土他一篇　木村三千子
峠　山前実治

44号　48・8・20
悪夢　杉本長夫
今日もよく売れている木村三千子　井本木綿子
無明Ⅰ・Ⅱ　天野忠
疑問　冨岡益五郎
湯どうふの弁　山前実治
整

45号　48・12・20
老松　依田義賢
驢馬のうた　八木一夫
法　天野忠
ファンタジー他二篇　井本木綿子

棟割長屋から　木村三千子
黄色いモール　荒木利夫
日録　冨岡益五郎
口伝　山前実治

46号　49・6・20
いきなり　天野忠
鶯　依田義賢
今日も一日　木村三千子
オイディプス王他二篇　井本木綿子
憬他一篇　山前実治

47号　49・10・20
北京のくろっきい　依田義賢
旗日　天野忠
兵火他一篇　井本木綿子
何のために　木村三千子
憬他一篇　山前実治

48号　50・4・20
修羅Ⅰ・Ⅱ　井本木綿子
古稀　八尋不二
音　木村三千子
年賀　天野忠
鴒鴿簫　依田義賢
抒べる他一篇　山前実治

49号　50・10・20

青春　天野忠
包帯　依田義賢
背を丸くして　木村三千子
熱い砂　古家晶
めぐりあい　荒木利夫

50号　51・2・29
像　荒木利夫
山上の墓地　田中克己
首つり　天野忠
砂漠のノートⅠ　依田義賢
日録ーぼろ靴の風懐　冨岡益五郎
この頃は　木村三千子
落葉　井本木綿子
ゆめ　古家晶
骨灰　山前実治

同人

荒木利夫
大鋸時生
冨岡益五郎
古家晶
安田章一郎
佐野猛夫
西山英雄
八尋不二
山前実治
依田義賢
天野忠
井本木綿子
大浦幸男
木村三千子
八木一夫
田中克己